

未来の図書館 研究所 第2回シンポジウム 記録



図書館とソーシャルイノベーション

- 日時 2017年10月11日（水）13：30～16：30
- 会場 日比谷図書文化館内（地下1階）
日比谷コンベンション大ホール
- 主催 株式会社 未来の図書館 研究所

プログラム

13 : 30～13 : 50 シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

永田 治樹 (未来の図書館 研究所 所長)

13 : 50～14 : 35 【講演】「図書館で変わる！地域が変わる！

～ソーシヨルイノベーションに向けて」

太田 剛 氏

(図書館と地域をむすぶ協議会 チーフディレクター)

14 : 35～15 : 10 【講演】「図書館はコミュニティを育てる場」

宇陀 則彦 氏 (筑波大学 准教授)

15 : 10～15 : 30 休憩

15 : 30～16 : 30 ディスカッション

●パネリスト 太田 剛 氏

宇陀 則彦 氏

●コーディネーター 永田 治樹

シンポジウム開会のご挨拶と趣旨

(永田)

こんにちは、未来の図書館 研究所の永田と申します。第2回未来の図書館 研究所シンポジウムを始めるにあたって、ご挨拶を申し上げます。

皆さま、大変お忙しいなか、ご参集いただきましてありがとうございます。今年度もこの企画が実施できるのは、まずは皆さまのご参集のおかげであり、またお二方が発言者としてお受けいただいたことによります。本日もよろしくご協力のほどお願いいたします。

私どもは、未来の図書館を構想するにあたって、今現在の図書館がどんな機能を果たしているかをきちんとおさえ議論しようということで、第1回の昨年度は、和歌山大学の渡部幹雄先生と、カーリルの吉本龍司さんにご見識を披瀝していただき、種々の観点について議論しました(その議論の内容は、研究所のWebサイトにも載っているのですが、印刷物にもいたしまして、皆さまのお手元に配布いたしました『未来の図書館 研究所 調査・研究レポート2017』に掲載してあります。お目通しをいただければありがたいと存じます)。それに続きまして今回は、昨年の議論でも注目されていましたコミュニティの観点から図書館を考えてゆきたいということで、「図書館とソーシャルイノベーション」というテーマにいたしました。

ソーシャルイノベーションというのは、ときおりは耳にはするけど、あまり普段使わない概念かと思えます。社会を変革する、社会をよりよくしてゆく動きという意味です。ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)が図書館カンパニーを設置する際に表明した趣旨を思いおこしてみてください。図書館というのは、人々の読書や話し合いを通じてコミュニティをよくしてゆこうという仕掛けです。そのように、ソーシャルイノベーションは図書館と割となじむものだと思います。

そこでこの類似性に着目し、現在ソーシャルイノベーションといわれている活動から、図書館にとっても有用な示唆が得られるのではないかと考えました。また、ソーシャルイノベーションが、後ほど説明いたしますように、営利、非営利という枠を超えて展開されています。図書館はむしろ公共の施設ですが、その運営については現在難しい状況にあります。ソーシャルイノベーション活動のこの側面が図書館の現状を打開するブレークスルーを与えてくれるかもしれません。

そんなことを思い浮かべつつ、今回これを取り上げましたが、その直接のきっかけとなったのは、一つは今年の1月、アトランタであったALA 冬季大会での図書館の未来を議論するシンポジウムという催しでした。そこで「図書館とソーシャルイノベーション」がテーマとして取り上げられました。シンポジウムでは、図書館との関係のみを議論するものではなかったものの、ソーシャルイノベーションの課題は図書館にとっても取り上げなくてはならないのだと、出席者は了解できたようです。そして二つ目のきっかけは、なによりも国内の、太田剛さんの図書館と地域をむすぶ協議会です。図書館を通じて社会を変えようと標榜している活動です。太田さんは存じ上げていましたが、ソーシャルイノベーションを掲げた図書館の活動で、再度太田さんに遭遇したようでした。それに、皆さんの図書館でもやはり、ソーシャルイノベーションと同じような考え方でもって、いろいろイベントなり、サービスなりを展開しているということもありましようから、この議論をこの時点でやっておきたいと考えるに至りました。

このシンポジウムでは、図書館をめぐるソーシャルイノベーションというアイデア、あるいは、その実践がどのように展開されているかを確認し、さらに今後どのように進められるかを考えたいと思いま

す。端的にいいますと、図書館をベースにコミュニティを革新できるかが、今回のシンポジウムの問題意識です。

以上が今回のシンポジウムのテーマへ向けてのいきさつでございます。これを、私の所長としてのあいさつにかえたいと思います。

そこで早速ですが、シンポジウムのプログラムに入ってゆきたいと思います。私はコーディネーターという立場でありまして、まずはシンポジウムの全体を説明させていただきます。ちょっと座らせていただきます。

先ほどは非常にゆるく、ソーシャルイノベーションとは社会をよくしてゆくものだと申し上げましたが、もう少し言葉を添えておかないと話が進まないかと思います。お二方の発表に入る前に、あと10分程度いただいて、私のほうから「ソーシャルイノベーションとは」について、もう少し説明させていただきます。次いで、お二方からのご発表を、それぞれ45分、35分程度お願いしたいと思います。

発表いただくお一方は、皆さまからみて左手の太田剛さんです。太田さんには、「図書館と地域をむすぶ協議会」でのさまざまな試みや実績を踏まえて、図書館とソーシャルイノベーションを語っていただきます。もうお一方は、右側の筑波大学図書館情報メディア研究科の宇陀則彦さんです。宇陀さんから、ソーシャルイノベーションを展開するには、人々が意見を交わし、価値観の共有や新たな関係をつくり上げる場が必要だということで、そうした場についてフューチャーセンターを参照にしつつ、図書館のあり方を語っていただくことになっております。

ご発表は15:10あたりで終わると思いますので、そのあと20分程度休憩いただき、それから15:30から1時間、ディスカッションをしたいと思います。そんな設定であります。

さて、冒頭にも申しましたように、皆さんは、ソーシャルイノベーションという言葉に耳にされていると思いますが、必ずしも人口に膾炙しているわけではなく、ときに、この言葉はバズワードだともいわれ、もっともらしいけど、実際には定義や意味があいまいだと指摘されます。

ソーシャルイノベーションは、社会的な革新、社会を変える活動であると申しましたが、例えば、モバイル機器、皆さんがおもちのスマホなんかはですね、この数年の間に本当に社会を変えたと思います。そしてその技術的な便宜性だけではなくて、例えば人と人のコミュニケーションの関係についてもわれわれの社会関係のあり方をずいぶん変えたと思います。しかしこれは製品のイノベーションであり、いわゆるビジネスイノベーションです。ビジネスイノベーションといわれるものがなにかというと、収益を得ることが前提であり、収益を求めてそういった技術開発がなされ、それが世の中に普及して、その結果として社会が変わったというわけであります。これはソーシャルイノベーションとは申しません。

ソーシャルイノベーションというのは、社会的なニーズに合致するという目的に動機づけられたもので、収益を得ることは組織の存続としては当然ですし、収益が多いほうが事業は拡大してさらに社会の変革ができるわけですから重要なのですけれども、収益だけが中心的課題、中心的動機ではないというものであります。そのところ、なかなか難しいので、ソーシャルイノベーションを実際に展開しているものにはどんなものがあるかを具体例でみておきましょう。

図1のスライドにあげましたように、例えばオープンソースのソフトウェアです。ご存知のLinuxとか、各種各様、実際ものすごい数に上ると思います。また、自然食品の普及活動、ビオ（日本ではオー

ガニックといいます)といった、自然食品の普及販売活動もそうです。次に、開発途上国における人々の生活が維持できるように、生産物を買叩くくじやなくて必要な経費はきちんと払ってゆこうというフェアトレードという活動があります。あるいは、人々がきちんと状況を理解できるような教育モデルを提供する活動もそうです。オープンソース、フェアトレードあたりは市場で、つまり企業的な形で展開されていると思います。教育的なモデルは特に学術的な世界などと共に展開されています。

企業的な形で有名なものに、マイクロクレジットがあります。商業銀行あたりから融資を得られないような人々を対象とする、非常に少額の融資をするものです。バングラデシュでつくられたグラミン銀行は成功をおさめ、それをつくった方はノーベル平和賞をもらいましたね。このビル(図2)はグラミングループのビルで、グラミン銀行もこのビルに入っていますが、この写真で読み取っていただきたいことは、この種の活動でも規模を大きくすることの大切さです。規模が大きくなれば、それだけ社会改革が大きくなります。



図1 ソーシャルイノベーションとは、



図2 グラミングループ社屋

さらに、ホームレスのための雑誌として、皆さまも街角で『ビッグイシュー』という雑誌を売っているのをご存知かと思いますが、その販売収益はかれらの生活支援にあてられています。それからさまざまな公衆衛生の活動もあります。ここであげられた例をみると、多くのものが企業的な形でソーシャルイノベーションは展開されています。

図1のスライド中の左は「いんどり」(<http://www.irodori.co.jp/>)という会社のものです。皆さんよくご存知かと思いますが、徳島県の上勝町の「葉っぱビジネス」、町の高齢者たちが、料理に添える葉っぱを取ってきて、その葉っぱをうまく売って、高齢者たちの生きがいや、健康管理にも有用な効果を得たという事業です。

あと2分しかありませんが、もう一点。ソーシャルイノベーションはいつごろからいわれてきたか。思想的にさかのぼれば、ロバート・オーウェン(Robert Owen)の運動にもつながるでしょうが、これが表面に出てきたのはだいたい世紀が変わるころ、21世紀になってからといわれています。なぜそのようなタイミングに出てきたかという、われわれが抱える問題が非常に難しくなってきたことが理由です。

20世紀末の頃から、一般に企業が合理的というか、非常にスリムな経営を始めまして、そうしますと雇用問題に響き、雇用不安が出てきたり、あるいは会社もスリムになり余裕がもてなくなって、組織内外で共同して事業を展開するというような雰囲気がなくなってきました。そういう状況は、国や地方というような行政サイドでも同じで、いわゆる新自由主義的な政策が選好され、行政改革の推進のような話になります。なるだけ経費を削減するところにゆきます。もちろん、このこと自体には有効性もあり、インフレーションの抑制とか、生産性の向上には成功したと思います。しかし小さな政府を目指すなかでは、健康、文化、福祉、環境というような予算が削減され、対応が遅れがちになりました。

われわれの図書館予算の削減もその一環だと思います。そして、貧困や就労の問題が顕在化し、以前は相互扶助的な役割を果たしていた地域コミュニティが縮退してゆくというような社会状況になってきました。こういう社会状況が広がり、社会的課題が深刻になってきたということで、世紀の変わり目のころより、公共性でもなく、利潤追及でもない新しい行動原理が出現してきたのです。社会的価値を追求してゆくことにより、社会的課題の解決を図ろうという動きです。これが、ソーシャルイノベーションです。ですから、ソーシャルイノベーションという動きはかなり目新しく、最近になって社会的に認知されるようになってきたものです。

まずは状況が厳しくなって、現状変更のニーズが出てくるというのが一つあり、また、変更するということは、今までのアイデアとは違ったものでなくてはならないという点もあります。新しいアイデア、あるいは、今までのシステムと違ったものでなくてはならないというところもみえます。さらにもう一つ、問題は複雑だということですね、いろんな問題につながっているということです。例えば地球温暖化の問題でも、ただ石炭の使用を中止してしまえば解決できるというものではない。さまざまなところに関連している、それは経済に関連するだけでなく、われわれのひとりひとりの生活にも、環境破壊の問題が関係しています。かなり広い視野でこの問題を考えなければいけないということがあります。このような課題、あるいは状況を踏まえて、ソーシャルイノベーションというのは、「公共性でもなく、利潤追求でもない新たな行動原理と社会的価値を追求してゆくことにより、社会的課題の解決を図ろうとする動き」だと規定しておきたいと思います。

少し時間が超過しましたが、早速、発言者のほうにバトンをタッチしたいと思います。それでは、太田先生よろしくお願ひいたします。

【講演】「図書館で変わる！地域が変わる！ ～ソーシャルイノベーションに向けて」

(太田)

それでは「図書館で変わる！地域が変わる！ ～ソーシャルイノベーションに向けて」ということで、お話しさせていただきます。

まず、この映像ですが、私ども「図書館と地域をむすぶ協議会」が、ソフト関係を全部コーディネートして、昨年7月にオープンした茂木町の、「ふみの森もてぎ」という新しい図書館がオープンする3ヶ月くらい前です。建築設計は龍環境計画さんが地元の木材をふんだんに使った素晴らしい建築をつくってくれたのですが、私たちはその中身をフルコーディネートしました。この映像は、なにをしているかという、もともと茂木町には図書館がなくて小さな図書室があったのですね。その図書室から、普通は業者さんをお願いして蔵書をトラックに積んで引っ越しをするのですが、だいたい古い図書室から新しい図書館の間って400mくらいなのですが、町民を350人集めまして、一列に並んでいただいて、全部手渡しで引っ越ししました。これが私ども「図書館と地域をむすぶ協議会」の考え方を、とてもよく象徴していると思うので、講演会などでいつもお見せしています。これは業者さんをお願いしてお金を払えば済む話ですよ。私はもともと引っ越し屋で4年くらい働いた経験がありまして、数千冊の本の引っ越しはあっという間ですよ。それこそ2トン車1台あれば入ってしまう。それをこうやって1冊ずつ350人の手で、みていただければわかるように、本当に老若男女、最後のほうには車いすの方々も並んでいらっしゃいますが、なかには図書室を使ったことないという人も多いわけです。

この時運んだのは2,000冊くらいですが、一冊一冊、350人の町民が蔵書を手にする。しかもこの400mの道路は、茂木町のかつての中心商店街で、今はすっかり閑古鳥といますか、ただ、ちょっとおもしろい商店街で、シャッター街ではない。店は開いているのですが、人の気配がない(笑)。だから、このなかには店番していたおばあちゃんが「なんだ？なんだ？」と出てきて、「お祭り以外で、こんなにこの商店街が賑わったのは何十年ぶりだ！」って泣いていたりして。これはまだ直接経済化するわけではないのですが、私はこういう事を一つ一つ積み重ねて起こしていくことが、ソーシャルイノベーションにつながるのかなと思っています。ちょうど今、青いベストの人たちは、地元の信用金庫の方々ですが、こういう地元の企業さんも人を出してくれたり、あるいは、この時来てくれた皆さんに地元の和菓子屋さんの協力でお土産を用意するとか、いろいろな“つながり”が生まれていきます。なんとなくソーシャルイノベーションというとなんか難しそうですが、それまで業者に頼んで、お金で解決していたような事でも、ちょっと考え方を換えれば、なにかがスタートができるのではないのかなと思っています。

では、今日は「図書館で変わる！地域が変わる！」ということで、お手元にお配りした資料は、写真などはプリントしていないので数枚ですが、用意したPowerPointは120枚あって、45分しかないので急がないといけない(笑)。最初にお手元の資料の裏側にある私のプロフィールをみていただき(図3参照)、私がどういう立場の人間かっていうのをざっとご説明しますと、もともと高校の先生でした。大学の専門は昆虫で、農学部の応用昆虫学です。その流れで生物の先生を3年半ほどして、松岡正剛さんが所長の編集工学研究所に入りました。そこから23年、このプロフィールに載せているのは、主にまちづくり、地域関係のお仕事だけをピックアップしていますが、これ以外にも民間ですと、例えば東京ディズニーランドさんの2020年計画とか、HONDAさんの新しい事業プランとか、NTTさんのグループCMをつくるとか、編集工学を応用して、いろいろなお仕事を経験してきました。で、ちょうど5年くらい前です

か、暖簾分けといいますか、編集工学機動隊 GEAR として独立しました。その最初のお仕事は、ミャンマーのジャングルに入って戦場カメラマンのような (笑)。ミャンマーでは、今、ロヒンギャが問題になっていますが、ミャンマーには少数民族が 130 以上あって、そのうち少数民族武装勢力といわれる民族が 11 もあって、政府軍と戦っているのです。そういう武装勢力の根拠地について撮影をするような仕事をしている時に、北海道の幕別町図書館の館長さんから、どうも腑に落ちないことがあると相談いただいたのが図書館との関わりの始まりです。なので私は、図書館の専門家でもなんでもないので、お話を聞いていらっしゃる方のなかには専門の方もいて、こいつなにやってんだっと思う方もいらっしゃるかと思いますが、こういう来歴だと言うことでご容赦いただければ幸いです (笑)。

太田剛プロフィール

- 編集工学機動隊 GEAR 代表
- 図書館と地域をむすぶ協議会 チーフディレクター
- 慶應義塾大学講師 (ネットワークコミュニケーション実践)

■ 1965年和歌山市生まれ/茨城県潮来市出身。明治大学(農学部応用昆虫学)卒。高校理科教師等を経て、1990年編集工学研究所(松岡正剛所長)に入社。映像から雑誌・書籍のメディア制作、文化イベント企画・施行、企業の事業戦略から自治体の観光戦略・町おこし、各種システム研究・開発など、編集工学を応用した企画・制作・研究・開発全般を担う GEAR 事業部を統括する。

■ とくにメディアミックスした自治体の IT 戦略・観光戦略と地域づくりを複合したプロジェクトを数多く手がけ、地域コンテンツの掘り起こしと編集人材の育成を核とした「編集」による地域活性化のアプローチには定評がある。また、1995年より金子郁容(慶應大学教授)らと地域 ICT 利活用の数々の実証実験プロジェクトを推進し、藤沢市市民電子会議室、岐阜県情報化戦略ほか、ICT を活用した地域活性化のスペシャリストとして各種事業に参画する。2008年より慶應義塾大学(SPC)にて、ネットワークコミュニケーション実践を教える。

■ 図書館および読書空間関連では、松岡正剛と共に20年以上にわたり図書館プロジェクト(NICT+総務省)や松丸本舗(丸善)はじめ、日本の書籍・読書・出版・図書館等、国内外の書籍と読書に關係する多様なプロジェクトのチーフ・ディレクターとして活躍する。

■ 2010年よりネット上のハイブリッド書店「honto」(大日本印刷/CHIグループ)の立ち上げに、コンテンツDB統括リーダーとして参加。さらに全国の図書館の書誌DBと管理システムを徹底して調査・研究しながら、国民読書年関連プロジェクト等に参画する。

■ 2012年に株式会社ギア(編集工学機動隊 GEAR)を設立。松岡正剛事務所・編集工学研究所と連携しながら、日本財団とのプロジェクトでは世界18カ国を含む国内外の各地に活動の輪を広げる。2013年より幕別町図書館(北海道)改革で全国的な注目を集め、「図書館と地域をむすぶ協議会」を設立。新図書館建設やリニューアル、システム改修事業など、図書館と地域の関係を再編集する数々のプロジェクトを実践、またはアドバイザー、講演などで全国を飛び回っている。

◎業務経歴(地域および図書館関連プロジェクト中心に主なものを抜粋)

- 図書館プロジェクト開発リーダー(NICT+総務省+慶應義塾大学)
- 歴史探索型システムプロジェクト開発リーダー(経産省+慶應義塾大学)
- 述語検索型資料管理システム開発(外務省)
- 国民読書年プロジェクト読書SNSチーフディレクター(文部科学省+大日本印刷)
- 理科教材管理・編集・配信システム開発リーダー(文部科学省)
- 災害時におけるネットワークサービス相互接続研究会(経産省)
- ネットワークコミュニティ研究プロジェクト(ニフティ)
- 総務省「ICT住民参画研究会」(座長:石井威望)WG委員
- ネット書店「honto」コンテンツDB統括リーダー(大日本印刷/CHIグループ)
- 仮想本棚SNSサービス「本座」チーフディレクター(編集工学研究所)
- 「松丸本舗」プロジェクトプランナー(丸善+大日本印刷/CHIグループ)
- 全国市町村アカデミー講師「ITと市民コミュニティ」
- コンテンツ配信標準化委員会委員(日本規格協会)
- 京都デジタルアーカイブ チーフディレクター(総務省・京都市)
- 札幌市地域文化資産デジタルアーカイブ構築業務(札幌市)
- 岐阜県情報化戦略および観光戦略作成業務(岐阜県)
- 岐阜県デジタルアーカイブ企画制作(岐阜県)
- 住民参加型教育コンテンツ流通実験(箕面市・岡山市・総務省)
- 金沢市学習プラットフォーム構築実験(NTTコム・金沢市・総務省)
- 金沢市文化芸術振興プラン策定業務(金沢市)
- 地域ICTシステム開発・運用支援(藤沢市・札幌市・洲本市・狛江市ほか)
- 地域SNS市民記者養成プロジェクト(静岡県浜松市・埼玉県秩父市)
- 岡崎市新美術館設立事業映像ディレクター(愛知県岡崎市)
- 平城遷都1300年記念「NARASIAプロジェクト」映像・ICTシステムディレクター(奈良県)
- 国際ハンセン病制圧活動/ミャンマー少数民族武装勢力映像記録ディレクター(日本財団)
- 幕別町図書館システム改修プロジェクト チーフディレクター(北海道幕別町)
- 「ふみの森もてぎ」ソフト&デザイン計画コーディネーター(栃木県茂木町)
- 「ゆいの森あらかわ」アドバイザー(東京都荒川区)
- 「ゆすはら森の中の丸ごと図書館建設支援業務」チーフディレクター(高知県橋岡町)
- 活字文化推進議員連盟「全国書誌情報の利活用に関する勉強会」実務者会議委員

図3 太田剛氏プロフィール

今日の話、「図書館で変わる！地域が変わる！」ですが、ここでちょっと注目して欲しいのは、「図書館「が」変わる」ではないのです。図書館「で」変わる」なのですね。この「が」が「で」であるところが、私は今日のテーマの「ソーシャルイノベーション」の根本的なところだと思っています。「図書館「が」」と、図書館を主語で話しているうちはなにも変わらないと思います。では、「図書館「で」」なにが変わるのかっていうと、「地域「が」変わる」。今日はこの「で」と「が」にちょっとこだわってみ

ていただきたいと思います。

お手元の黄色い冊子（『綴』通信』2号）ですが、私ども「図書館と地域をむすぶ協議会」で、1年に1回発行している冊子です。本当は年に3回ぐらい出したいのですが、今、私は都内に月10日もないと思いますが、全国を飛び回っていて、余りにも忙しすぎて年1回しか出せない（笑）。最初が2014年11月の図書館総合展で配った創刊準備号のタイトルが「図書館の本来と将来を考える」。「図書館と地域をむすぶ協議会」ができたばかりのときです。当時は武雄市の図書館が話題になっていた頃ですね。どうも図書館の本来を忘れていないかと、もう一回図書館の本来を考え直して、将来を考えようよということで、このタイトルになりました。次の2015年に発行したのが創刊号で、タイトルが「地域づくりの核となる図書館」。私どもの協議会でも、幕別町図書館とか茂木町の新図書館などの事例ができてきて、われわれは「地域づくりの核となる図書館」を目指してやっというということで、こういうタイトルになりました。次の、昨年になりますね、2016年のタイトルが、「地域づくりの核になる」をさらに一歩進めて、「図書館でソーシャルイノベーション」になりました。ちょうどこれが1年前です。この1年で、「ソーシャルイノベーションと図書館」という話は、ガンガン流行ってくるだろうと思っていましたが、意外と来てなくてですね（笑）。「あれ？なかなかついてこないな」って思っていたときに、今回永田先生からお話いただいて、「ああ、やっときたか」と思っているわけですけど（笑）。

これは日経新聞の記事（2017年1月10日、https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG09H3Y_Q7A110C1CR0000/）ですが、日本図書館協会さんがこういう調査結果を発表しました。少しびっくりしたのですが、「図書館をまちづくりの核に 497自治体が交流や就業支援の場」として位置づけてますよというようなレポートなのですね。このタイトルからして、日図協さんが「図書館をまちづくりの核に」とかいいたすとは思ってなかったの。しかもアンケートの結果は、497自治体がもうやっていますと手を挙げたと。中身を見ると「これ、まちづくりかい？」っていう案件もあって、どうかなという疑問もありますが、ただ一応497自治体が図書館をまちづくりの場だと考えていると考えれば、ここまできているんだって感じ入りました。さらに、明日からですよ、日図協さんの図書館大会。大テーマが「まちづくりを図書館から」とうたっています。「(仮)」ってなっていますけど、これでいくのでしょうか。日図協さんもこっちにくるんだって、ちょっとびっくりしているわけですけど。われわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」は、こうやって2014,15,16年と、段階を経て「まちづくりの核になる図書館」を考え続けて、「ソーシャルイノベーション」まできたのですが、次の今年、ちょうど編集中ですが、どういうタイトルにしようか、この先に何がくるのかと考えているところです。

今日はこのソーシャルイノベーションの話をして。先ほど永田先生から、ソーシャルイノベーションについて説明いただいたので、だいたい皆さんご理解いただいたかと思います。これは一つの定義ですが、日本財団の「ソーシャルイノベーションフォーラム」によると、「よりよい社会のために新しい資金を生み出し、変化を引き起こすそのアイデアと実践」、それがソーシャルイノベーションだと定義しています。その次が大事なのですが、ソーシャルイノベーションが多く「実践されることによって、本当の意味での持続可能な、みんながみんなを支える社会」が実現すると。つまり持続可能な、みんながみんなを支える社会をつくる、これがソーシャルイノベーションだといっています。

実は、われわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」はソーシャルイノベーションを目指してやっていたのではなくて、先ほどの茂木町の新図書館とか、これから話す幕別町図書館のシステム改修から始まったのですが、そういう図書館案件に関わるなかで、あとからこのソーシャルイノベーションという概

念を日本財団のフォーラムで知って、「われわれがやっていたことって、このソーシャルイノベーションなんじゃないの?」と、気がついたという感じなんです。

では、どういつもりでやってきたかというところ、ここ5年ぐらい、いろんな図書館に関わりながら、相談を受けたり、話を聞きにいったり、いろいろ見聞きする中で、すごく感じたのが、この「今だけ、金だけ、自分だけ…でいいんですか?」(笑)。これ、ある本屋さんで平台を眺めてて、1冊だけ裏返っていて、この裏表紙の帯をみてドキッとしたのですが。これを「3だけ主義」といって、最近けっこう聞くようになりました。「今だけ、金だけ、自分だけ」、この「自分だけ」のところを「図書館」に変えたときに、「今だけ、金だけ、図書館だけ」でいろいろなことが動いている事例があまりに多いんじゃないのかと気がついたんですね。先ほどのソーシャルイノベーションの逆がこれだと思います。「今だけ、金だけ、図書館だけ」といえば、先ほどの茂木町の引越しもそうで、引越業者に丸投げすれば、今はそれでいいかもしれない。でも、業者さんを叩いて、段ボール代まけさせたりして(笑)、予算は助かったかもしれない。でもそれって図書館のためにはなっているけれども、市民のため、町民のためになっているか考えたときに、少しやり方を変えるだけで、すごくおもしろいことができるじゃない?茂木町の例だと、あの引越大作戦を実行委員会方式にしました。その実行委員会の人たちが核になって、後に「ふみの森のこだまの会」という図書館のサポート組織ができました。今では百人以上のメンバーに拡大して、様々な図書館のお手伝いをいただいています。このように、当たり前に行っていることの、少しやり方を変えればいろいろなことができるんですね。

今日まず、幕別町で“図書館と地域をむすぶ協議会”がやった事例を、こういうプリント(図4参照)が皆さんのお手元に配られていると思いますが、この図を中心にお話をしてゆきます。



図4 幕別町図書館(北海道)実践モデル

(<http://www.toshokan.club/wp-content/uploads/2015/11/mbt4cycle.pdf>)

私が図書館に関わることになった最初、ことのはじまりは幕別町図書館でした。先ほどお話した、ミヤンマーの武装勢力をまわったり、世界中のハンセン病コロニーをまわったりしているときに、幕別町図書館の長谷館長さん、この方は企画畑などにいた方で図書館は門外漢でした。その長谷さんが、定年までの残り4年くらいの最後の花道として、図書館長になりました。幕別町はこういう（図4の中心の写真を参照）図書館で、春になるとタンポポが咲き乱れる美しい図書館ですね。この本館と、他に分館二つで約24万冊の蔵書数です。その門外漢の長谷さんが館長になってみて思ったことが三つあったそうです。一つ目は「なぜうちの図書館の本棚はワクワクしないのか」。「本屋さんの本って読んでくれ読んでくれて迫ってくるのに、なんでうちの図書館の本ってこんなに読まないでくれて顔しているの？」と思ったそうです。これ割と簡単な話で、図書館関係の方はわかりますよね。NDCは別にワクワクさせるためにできている体系じゃないので、NDCで分類配置された図書館の本棚は「読んで読んで」って迫ってくるわけじゃないです。実は、その前に選書の問題もあるのですけどね。二つ目が、「なぜ蔵書点検に1週間も10日も休んでいるのか」と。「普通の本屋だったらつぶれているだろう。そういうこととしていいのか」と思ったと。三つ目は、「なんでOPACは、自分の館のなかの本の有無しか教えてくれないのか」と。「本来だったら、近隣の図書館、あるいは近所の本屋でその本が買えるかどうか、そこまでナビゲートしてはじめて地域の人に“本のレファレンスをするのは図書館だ”って胸を張れるんじゃないのか。自分の図書館のなかだけ案内していて、こんなんでもいいのか？」と、三つの疑問を持って相談にきました。

私も、当時は図書館の専門家じゃないので、そんな三つの疑問を持ち込まれても、ふーんって聞くしかない（笑）。では、ちょっと調べてみましょうかということで、皆さんのお手元の図の「発端、契機」になりますが、元々はシステム改修のお手伝いから入ったのです。先ほどの蔵書点検の休館日が長い話だとか、図書館間の相互連携とか、そのあたりの疑問はシステムでほぼ解決できると思いました。これはLENコード（カメレオンコード）というカラーコードなんですけど、幅3.2ミリくらいまで小さくできます。これを蔵書の背表紙に全部貼って、カメラで横にサーッと撮ると一気に蔵書点検できてしまう。幕別町図書館で全国初の全面導入に踏み切ったのですが、このおかげで蔵書点検の休館日はゼロにできました。問題は、ワクワクする本棚なのですが、NDCの分類配列を全部崩してやりかえるわけにもいかないので、このLENコードとセットで編集的な概念をもった蔵書管理システム（チェンジ・マジック）を導入して、いろいろな特集棚を自由にガンガンつくれるようにしました。

今日の話の本題はシステムの話ではないので、図書館総合展に来ていただければゆっくり話しますが、一応、LENコードと蔵書管理・書架編集システムで三つ疑問はほぼ全部クリアできたと。けれども、そのシステム改修の準備の過程で、いろいろなことがみえてきたわけですね。まずこのLENコードを装備しないとイケない。そのために、図書館が新しい本を買うときに、装備してくれる所をお願いに行く必要がある。ふたを開けてみたら、本は東京の専門業者から買っていると。どうして図書館のすぐ近くに地元の本屋さんがあるのに、そこから本を買わないのか？しかも、東京の業者にLENコードを貼ってほしいとお願いにいったら、断られました。フローが決まっているので、そんなめんどくさいことできないと。じゃあどうしようということになった。そもそも地元の本屋さんから本を買うのが筋だろうということで、相談にいきました。もう代替わりしていて、若い社長さんなんですけど、連絡していったのに迷彩服で「なにしに来た？」みたいな顔して出てきました（笑）。

いろいろ話を聞くと、図書館のすぐそばの本屋さんなのに、産まれてから一回も図書館に行ったことがないと。もう関係が完全に切れてるんですね。でも、形だけは書店組合から納入することになっていて、実際は東京の専門業者が発注を受けて、装備も納品も全てやっている。組合には2店登録されていて、納入された本の金額の5%がマージンとして組合に入り、お小遣い程度によくわからないお金が毎月入っているという。もう1店にも話に行きましたが、半分釣具屋さんようになっていて、高齢の店主にはとても電算化された図書館への納入はできそうもない。若い社長さんに、図書館でこういうことをやりたいので、地元の本屋さんから調達したいと説明すると、とてもできないっていうんですね。装備がネックになってできないと。本のフィルムコートですよ。

装備をまともにやると、1冊250円くらいかかる。1冊1,000円の本を売ると、もうけがだいたい210円から220円ぐらいです。図書館関係の方で、こういう流通のお金の話をほとんど知らない人もいますよね。「1,000円の本を本屋さんが売って、利益いくらか知っていますか」と聞くと、ポカーンて口開けてる司書さんが多い(笑)。これは知っといたほうがいいですよ。だいたい21%前後です。それで装備代250円もかかると赤字ですよ。1,000円の本ならまだいいですけど、文庫本とかね、600円の本で利益が120円くらいしかないのに、装備代に250円かかっていたら、もうやっつけていけないんですよ。「それはおかしいね」というのでいろいろすったもんだしている間に、その若い本屋の社長さんが自分で福祉施設をみつけてきました。就労継続支援B型といわれる福祉施設です。福祉施設で装備をやってもらおうというので、「ミラータイム」という小さな福祉施設ですが、最初は、図書館の司書さんたちが障がい者の皆さんに講習しました。アスペルガー症候群とか、発達障害とか、そういう方々なのですが、講習会は半日ぐらいで、ほぼ手順は覚えてくれたと。この写真は、講習が終わった後、みんなで自分で装備し終わった本を持って喜んでるところですね。そこで、幕別町図書館の新規購入の本は、全部こうやって、福祉施設にやってもらうことになりました。就労継続支援B型なので、B型って1日一人5千何百円くらいの給付金があります。それで職員の人件費や施設費用に回すんですね。工賃はそのまま障がい者の方の報酬になります。幕別町では、最初は書店が50円を負担して、フィルム代は図書館が雑費として負担して、三方一両損じゃないですが、書店も図書館も負担することで始めました。今までは全部東京の業者にタダでやってもらって、お金は助かった。さっきの「今だけ、金だけ、図書館だけ」ですよ。普通なら、これでよかったよかったとなるところですが、こうやってみんなで少しずつ負担して動かしはじめると、うまく回り出しました。

ちょうどこれがうまく回り出したときに、NHKの全国放送『おはよう日本』(2016年2月1日放送「特集 どうあるべき？公共図書館」)から取材の依頼がありました。ちょうど海老名のいわゆるTSUTAYA図書館さんがオープンしたときでした。その前に小牧市が大問題になって、市民運動で反対派が勝ってTSUTAYA図書館の計画は流れました。番組では、そういう経緯をレポートしながら、海老名市はオープンしましたが、賛否両論ありますよと。喜んでる人もいて、行列ができていますが、委託費は3億3,000万となり、かえって高くなっていますねと。検索がわかりにくいとか、どこからが書店で、どこからが図書館かわからないと不満を寄せる人もいますと。これに対して、なぜかNHKさんは、こういう民間に丸投げの方向に向かっている図書館もあれば、幕別町図書館のように直営で地道に地域づくりをやっている図書館もありますとぶつけてきたんですね。地元の書店から本を購入して、福祉施設で装備をやって、地域経済の小さな還流を起こしてますねと。NHKさんはどっちがいいとはいわないです。向こうは3億3,000万みたいな話で、こっちは1冊50円の攻防をしているわけで、比較されてもねえ

(笑)。けど、最後にスタジオにカメラが戻ったときに、スタジオの会話はかなり幕別町図書館を讃えてくれて、全国からの反響がすごかったようです。

幕別町の「ミラータイム」さんは、小さな一軒家で、6、7人がちゃぶ台を囲んで、正座しながら装備作業をしていました。装備って一人の人が1冊仕上げるのってけっこう大変ですけども、完全な分業制にしたんですね。切る担当は切るだけ、合わせる人は合わせるだけ、貼る人はひたすら貼る。そうやって分業すると、ものすごく作業が速くなりました。NHKさんが撮影に来たときも、20冊くらい用意していましたが、セッティングしていたカメラマンさんがOKですよ、本番いってくださいっていうと、もう終わりましたと(笑)。15分くらいでしたか？20冊くらいならできてしまうんですね。今は図書館だけではなくて、学校の図書室も福祉施設で装備をまかなっています。

それで、こんな狭い小さいところでちゃぶ台を囲んでやっていたのですが、図書館の装備って、必ず仕事があって途切れないんですね。それまで福祉施設にくる仕事は、なかなか継続しなくて不安定なんです。ときどきしか仕事がなかったり、季節的なものだったり。けれど、こうやって通年で必ず装備の仕事が継続するというのは、すごく助かることだということで、作業している人達も自信がついてくる。親御さんの話を聞くと、図書館のような、公共の社会の役に立っているっていうことは、本人たちにとっても、ものすごくうれしいことだったらしく、日に日に変わっていったというんですね。それで、「ミラータイム」の社長さんも自信がついて、分厚い申請書を頑張って書いて、助成金を得て、この写真のような立派な工房を建てちゃった (<http://millertime.web.fc2.com/>)。今は、この写真のような広い部屋で、机に座って装備をやっています。しかも、装備作業を担当しているメンバーの中に、エース級が二人いて、一から十まで全部工程をこなせましたが、この4月に民間の企業に就職できました。

結局、これは大きな目でみると、さっきいったように1日5千何百円の給付金、これって税金ですよ？その税金が使われていた二人が、納税者になったわけですよ。幕別町全体からみると、ものすごく大きいことです。装備は装備とってそれだけを切り出して、それがサービスでついてくるからと、東京の業者から本を買っている。地域の本屋さんが今どんどんつぶれていますよね。1日何十軒というペースで消滅しています。そんななかで、幕別町図書館の資料購入費は、だいたい800万ですから。そのうちの約20%っていうと160万ですか？本来は町の本屋さんに入るはずだったお金が、全部東京の業者に吸い取られている。装備がタダだからっていうけれど、その装備を福祉施設に回すことによって、そうやって何人もの障がい者と呼ばれる方々が、生きがいをもって仕事をして、結果として一般の企業にも就職できた。これ、全体をみれば、すごい人材育成のインキュベーションシステムですよ。図書館としては、二人がいなくなってすごく痛かったのは確かで、3ヶ月くらい装備が滞りました。でも、3ヶ月したら新しいメンバーが育ってきて、今また完全に回っていると聞きます。

このように、それまでは全部お金で解決して、装備をタダでやってくれるからって、東京の業者から本を買っていましたが、今は地元の本屋さんが、毎日のように図書館に来て、次の図書館まつりどうしようとか、今はこんな本が売れていますよとかっていうのを司書さんたちと情報交換して、一生懸命図書館づくりをやってくれています。こういうのが私は、一つのソーシャルイノベーションなのかなと思っています。小さな地域の経済循環を起しながら、人材育成もできるという。

そういう事例を幕別町で進めていたところ、皆さんのお手元にも答申書(出展:「これからの全国書誌情報のあり方について—いつでも、どこでも、だれでも使える—(答申)」。 http://www.jpo.or.jp/topics/data/20160615a_jpoinfo.pdf) を配りましたが、超党派による活字文化議員連盟の「全国書誌情報の利

活用に関する勉強会」で実務者会議の委員に呼ばれました。これは MARC の問題についての答申書なんです。この全国書誌情報というのは国立国会図書館が無償で出している MARC です。この全国書誌情報をつくるのに、人件費だけでも相当かかっていますよね。少なくとも億にはなりそうですね。なのに、今、国立国会図書館の全国書誌情報を全面的に使って、MARC 費用をタダで運用している公共図書館はほとんどない。図書館によっては 300 万とか使って民間の MARC を利用している。幕別町でも 100 万以上かかっていました。国が多大な予算をかけて、無償で提供している MARC を使わずに、公共図書館が何百万、何十万という予算をかけて民間 MARC を買っている。これは税金の二重取りじゃないですか。この超党派議員連盟の勉強会でもそういう話をしました。さらに、この答申書の中で問題視しているのは、ある民間 MARC の利用が決まると、今の図書館は電算化されているので、選書、発注、納入、検品、管理まで、一気通貫で決まってしまうんですね。そこに地元の書店が入る余地がない。MARC を決めた瞬間に全部持っていかれてしまう。しかもここに装備の問題がからんでいる。なので、この答申では、それを一回切り分けなさいと。それで一つ一つの問題を考えて、クリアにしていきなさい、というようなことが書いてあります。この答申を受けて、勉強会の実務者会議から作業部会という形に移りまして、具体的な課題の解決方法を議論する中で、JPO（日本出版インフラセンター）が出している新刊情報ですね、これは各出版社が出す情報なんです、早いもので出版の半年ぐらい前から情報が出て来ると聞きますが、それを国立国会図書館から全国書誌情報と同じフォーマットで提出すればいいのではないかと。公共図書館がなぜ全国書誌情報を使わないのかというと、アンケートをとっているのですが、遅いからという理由なんですね。確かにそうだと思います。納本主義といいますか、出版社から納本されて、MARC をつくるわけですから。ひどい出版社になると、半年後にもって来たりすると聞きました。それでは遅すぎますよね。だったらその遅いという理由を外しましょうというので、JPO の新刊情報を公共図書館でも使えるようにしましょうと。Amazon が使っている情報が JPO の情報ですよ。国立国会図書館さんもやりますよということで、おそらく来年の 4 月以降のどこかで、国立国会図書館さんから新刊情報を無償で落とせるようになります。しかも、JAPAN-MARC のフォーマットで取れるはずですから、それを公共図書館のシステムに落としておけば、予約も取り始めることができますよね。先行して発注もできるかもしれない。システムが API 連携でつながっていれば、後から詳細な JAPAN-MARC が仕上がってきたら、シームレスでそれを取り込んで、新刊情報と入れ替えることも可能です。作業部会では新刊情報を元に、選書をして書店への発注書まで作成することができるシステムを開発しました。ここまで用意したら、もう遅いからという理由で国立国会図書館の無償の MARC を使わず、高い民間 MARC を使う理由は無いかなと思います。

このように装備の問題も、MARC の問題も、これまでのセオリーを一回外して考えて、ソーシャルイノベーションという視点で、「今だけ、金だけ、図書館だけ」という閉じた考えは捨てて、地域を含めた形でしくみを考え直したら、新しい展開が可能なのかなと思っています。先ほどの答申書ですが、もう一つお手元にお配りしたのは、この答申書に資料として付けられた“幕別町モデル”を説明した資料です (http://www.jpo.or.jp/topics/data/20160615b_jpoinfo.pdf, p.16-17)。図書館システムと MARC を最適化して、本は地元書店から買って、装備は福祉施設と連携して、そこに地域の多様な人材を活用してゆくことによって、今まで当たり前のことだと思って、ずるずるとやっていたものを、もう一回ソーシャルイノベーション化する。そこで人が育つ、あるいはぐるっと地域の小さな経済が回る。これによって地元の書店さんがなんとか生き残れる、まだ頑張れる。私は地域の読書環境は、地元書店と図書館が手を組

まなければ守っていけないと思っています。図書館は図書館で揃えるべき本がありますから、図書館が駅前の書店に並ぶような売れ線の本ばかり並べてどうするんだと。だから本屋大賞に必要以上にうかれる図書館ってあんまり好きじゃなくて(笑)、それぐらいは本屋さんにまかせなさいよって思うんですけど。図書館には、図書館法にあるように、教養を担保するという使命がありますから、そのために入れなければならない一般書や、場合によっては専門書、あるいはいけないレファレンスブックとか、いろいろあるはずですよ。限られた予算の中で、どこの書店でも手に入るような流行本を入れるのは、ちょっと疑問なんですけど。本がいくらでも売れた時代ならともかく、今は地元の本屋さんと図書館がちゃんと手を組んで、役割分担をして、地域の読書環境をどうやって守ってゆくんだ、そこでどうやって経済を生み出して、なによりも読書を楽しむ人材をどうやって育ててゆくんだと、本気で考えないといけないと思うんですね。それがこういう装備だの、MARCだの、目先の予算削減みたいは話でおざなりになっていると、どんどんもう地域の読書環境はやせ細ってゆくと思うんですね。これこそソーシャルイノベーションの視点が大事な話だと思います。

このように、“幕別町モデル”といわれている図書館改革は図の右下(図4参照)のところまで進んできました。図の中にあります「サポート組織づくり」というのは、どういうことやっているかっていうと、幕別町図書館では Web サイト (<http://mcl.makubetsu.jp/>) も同時に全面リニューアルしました。そのために図書館のロゴマークもつくってあげました。Web サイトのデザインは、幕別町には日本を代表するグラフィックデザイナーの田中一光さん、残念ながら 2002 年に亡くなりましたが、おそらく唯一デザインした緞帳があったのです。幕別町の百年記念ホールの緞帳ですが、十勝の風景をそのままデザイン化した素晴らしい作品で、そのデザインを踏襲した Web サイトのトップページにしました。

また、この Web サイトには長谷館長にぜひやってほしいと頼まれて、蔵書管理システムと連動したバーチャル本棚 (<http://mcl.makubetsu.jp/index.php/2014-03-26-11-05-05/285056-2014-03-25-11-28-28>) というシステムも実装しました。選書したリストから Web 上で公開出来る本棚表示を自動生成してくれるシステムです。幕別町図書館には、森村誠一さんとか福原義春さんが、読み終わった本を送っていている「北の本箱」というコーナーがあるんですね。いろいろ紆余曲折あった末に、文化人が皆さん置き場が無くて困っている本を送ってくれたんですね。この本棚がすこぶるおもしろいんですけど、その中でも森村誠一さんと福原義春さんはいまだに送り続けてくれています。その本棚もバーチャル本棚で Web 上に公開しています。こういう Web サイトの運用に、人材育成をかませて、サポート組織づくりにつなげていこうと考えています。例えば、「あの人の本棚」というコーナーでは、ネギ農家のおやじが普段どんな本読んでるの?とか、図書館の裏に山本商店というユニークな雑貨屋さんがあるんですけど、そこのおやじは普段どんな本読んでるの?とか、消防士さん、看護師さん、魚屋のおやじとか、そういう人たちの本棚を、森村誠一さんとか福原義春さんとかと、全く同じシステムで提供しています。

こうやって人を徐々に多様な人材を巻き込みながら、「まくべつ BOOK サポーター」というのを育てています。略して「まぶさ」と呼んでいます。「まぶさの女」「まぶさの男」とかね(笑)。こういう「Edit まくべつ〜編集力養成講座」(<http://mcl.makubetsu.jp/index.php/events/286240-edit-mabusa>) ということで、毎月、私が北海道に行って、リアルな講座を 5 回やりました。その間に、ネット上でお題を出して、徹底的に添削します。その講座で編集力を身につけた人たちが、「まぶさ」デビューするわけですね。このように新聞社の記者さんにも取材してもらって、記事にしてもらいます。この写真は地元の歴史家の方の話を私がインタビューして、それを「まぶさ」の卵の皆さんにまとめてもらうという講座の様子で

すね。本棚編集も教えます。さっきいった NDC の分類が中心の棚では、破綻して崩れていくところなどを取り出して、文脈的な並びの棚を新しくおもしろくワクワクさせるように組んでみるというような講座もやっています。卒業するとういう修了証とともに「まぶさ認定証」が渡されます。「まぶさ」のなかでも、特にこの編集力要請講座を修了した方は、LED としてですね、図書館エディター (Library Editor) としてデビューします。さっきの山本商店のおやじも、「まぶさ LDE」になりました。あと、実はこのなかに、地元の新聞社の記者さん二人も入っています。このように養成講座をやりながら人材、編集力のある人を育てて図書館の運用に組み込んでゆくわけです。この写真は、その「まぶさ LED」が頑張ったハンセン病の企画展の様子ですね。私は日本財団さんの仕事でハンセン病に関わっていたので、ハンセン病のパネル展もやりました。今、こういうハンセン病のパネル展やってみたいという図書館さんがいらっしやったら、図書館と地域をむすぶ協議会でコーディネートしていますので連絡下さい。日本財団さんから預かった世界のハンセン病の写真パネルを無償でお貸しできます。これは小説『あん』を書いたドリアン助川さんですね。樹木希林さん主演で映画がヒットしましたね。「まぶさ」の方々がインタビューして、それを図書館 Web にアップしたりしました。

このように図書館サポーター組織を育てているところまできているのですが、幕別町図書館では、最終的にサポーターもできて、次の段階に入っていて、図の右上 (図4参照) にあるような新しい社会モデルをつくるような、予防医療とか医療負担の削減とか、自治体の抱える問題に図書館が積極的に関わっていかうということですね。このペーパーの裏側にですね、「知る・読む・笑う～図書館を核にした活字と笑いで活気あるまちづくり事業」というのがあります。 (http://www.toshokan.club/wp-content/uploads/2015/11/stress_rakugo.pdf)。これは、図書館にストレス測定器を置いて、利用者にストレスを測定してもらって、ストレスケア本を 500 冊くらい用意しています。もしストレスの数値が高くて、真っ赤っ赤になっちゃった人は、医療系の本をちゃんとレファレンスします。黄色ぐらいの人は、猫の写真集とかね、癒し系の本をすすめます。図書館の本は 2 週間後に返しにくるんで、そこでまた測定すれば、定期的に継続して測れるわけですね。実はもう一つ大事なのが、測定時のスタッフとの会話のなかに、例えば、青で全然ストレスなかったおばあちゃんが「そんなわけない」と、「うちの嫁は…」ってしゃべりだすわけですよ (笑)。そのなかに、ものすごい多様な町の問題が含まれているんですね。貧困の問題だったり、DV の問題だったり、いじめの問題だったり。そういうのを、幕別の司書さんたちがカウンターで察知して、行政の窓口につなげてゆくってことをやっています。これはストレスケアレファレンス研修の様子ですね。そういうストレス測定やストレスケアをやって、さらに落語会もやります。歌丸さんが会長の落語芸術協会さんと組んで、笑いが一番ストレスケアにいいというのは論文がたくさん出てますからね。ストレスに弱い臓器って、腎臓なんですよ。それで、透析患者一人いると、町の負担が 500 万だそうです。二人いると 1,000 万ですよ。幕別町図書館の資料購入費が 800 万ですから、二人ケアできれば、もとがとれるわけですよ。四人ケアしたら 1,000 万増やしてくれって町長に言おうかと (笑)。要はそうやって図書館でなにかやることによって町の経済にもう一回還元して還ってくる。これまで町のメインストリームから外れていた図書館を、まちづくりの中心にもってくるということで、こういうことをいろいろやっています。

茂木町の事例も同じような考え方で、茂木はもう町の本屋さんがなくなっていたので、日本一ともいわれる道の駅にツーパンの小さな本屋さんをつくって、その本屋さんから図書館に入れる本を買うようにしました。道の駅が第三セクターですから、いわば町営の本屋さんですね。装備も社会福祉協議会の福祉

施設と連携してやっています。今、梶原という、高知県の山のなかにある人口 3,600 人の町で、隈研吾さん建築設計の図書館をつくっています。建築中なんですけど、この CG のような図書館ができます。ここでも我々が、ソフト部分を全部コーディネートしているので、高知市内の書店さんと組んで、福祉での装備でやる予定です。海洋堂さんにジオラマをつくってもらったりもします。

このようにわれわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」はいろいろやっていますが、この名前ですね。「図書館と地域をむすぶ協議会」は長すぎて呼びにくいので、「図&地」協で「とんち」協って呼んでいます。実は、この「図」と「地」というのが大事なんですよね。code と mode です。情報には必ず「図」の情報、目にみえている情報と、「地」の情報、背景の見えない情報があります。ソーシャルイノベーションというのはこの図と地、code と mode の関係をひっくり返していくものかなと思っています。なので、図&地で「とんち」って、だいぶ気に入ってますので、どこかでみかけたら、ぜひ「とんち協」って呼んでくださいね（笑）。最初にいった「図書館で変わる！地域が変わる！」というのは、図書館で地域が変わるということなんで、主客、主語と述語をひっくり返す、図書館を主語で語らない、必ず地域を主語にする。図書館を述語的に扱ったときに、どうなるか。自分のことは後回しにする、図書館のことを後回しにして、まず地域のことを考えたときに、なにができるのかなというのを考えたらいんじゃないのかなって思います。そのために「今だけ、金だけ、自分だけ」でいいんですか？ということ問いかけ続けたいと思います。

皆さんのお手元に資料がありますが、今日は 45 分しかなかったのですが、11 月の図書館総合展での「とんち協」のフォーラムでは 90 分フルでしゃべります。もしよかったら来てください。あと、埼玉福祉会のフォーラム、これも 90 分で大きいホールでやります。佐藤聖一さんという埼玉県立の久喜図書館にいらっしゃる、全盲の司書さんです。去年やってあまりにも好評だったので今年もやるのですが、これも全く同じ話ですね。主客を転倒して、今まで障がい者と思っていた人を、ひっくり返して述語的に見たときに、図書館でなにができるのか。あとはメディアドゥさんのフォーラムでは和歌山県的那智勝浦でやっている文科省さんの教育格差解消のためのモデル事業の話をしします。読書習慣を身につけるコースウェア開発をしています。有隣堂さんのブースでは、AI 研究者でビブリオバトル発案者の谷口忠大先生と「ロボットに本シェルジュがつとまるか」という対談もします。もし興味がある方はみてください。ということで、ありがとうございました。

(永田)

ありがとうございました。ではひきつづき、宇陀先生お願いいたします。

【講演】「図書館はコミュニティを育てる場」

(宇陀)

それでは、筑波大学図書館情報メディア研究科の宇陀と申します。よろしくお願いします。私がどういう仕事をしてきたかという、図書館情報大学、それから筑波大学で図書館情報学の研究・教育をしてきました。太田さんに比べると、図書館に近い場で仕事をしてきたといえるでしょう。これから皆さんにお話するのは、図書館がよりよくなってゆくための新しい図書館の姿についてです。さっき太田さんからもありましたように、図書館の内部だけを考えていると、なかなか図書館の新しい姿がみえてこないと思います。

今回、永田先生からお題をいただいて考えたのは図書館内部の視点ではなく、外部の視点をいかに取り入れた話にするかでした(図5参照)。太田さんの話も結局これだと思うんです。図書館だけでなく、いろんな人を巻き込んでゆく、この視点の違いを意識することが重要です。つまり、図書館と利用者という二つの構造でみるのではなくて、巻き込んでゆく。この意識の切り替えが非常に重要です。私自身も、この切り替えが相当難しかったですし、油断するとすぐに図書館だけの視点に戻ります。皆さんも図書館だけでなく、みんなを巻き込んでゆくんだという意識をもっていただきたいと思います。

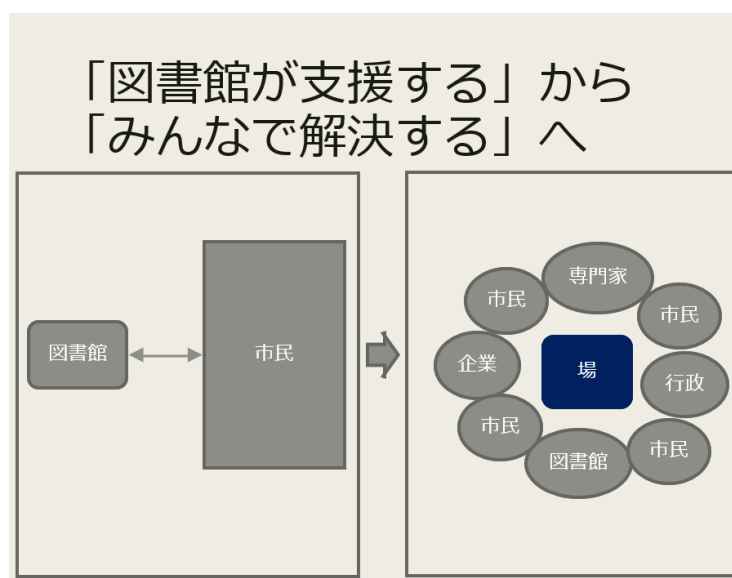


図5 「図書館が支援する」から「みんなで解決する」へ

さて、私はこれまでラーニングコモンズという大学図書館の新しい場についてかかわってきたので、今日は公共図書館の新しい場はどんな姿かということを考えたいと思っています。特に今回はソーシャルイノベーションがテーマなので、その枠組みのなかで考えます。すなわち、内部の視点の図書館「が」変わるのではなく、みんなが図書館「で」考えるを意識したいところです。

まず、「場」という言葉なんですけれども、「場」と「空間」は区別してとらえます。「空間」は設備を含む物理的スペースを指す言葉で、それに対して「場」は空間、人、設備、プロセスが結びついた活動を「場」と呼びます。例えば、このわれわれがいるホールも、なにもしなければ単なる空間ですが、パネルディスカッションや講演などの活動が行われていると、それは「場」なんですね。したがって、図書館を

単なる空間ととらえるのか活動の場としてとらえるのかは大きな違いということです。

今から「場」の例として「フューチャーセンター」という取り組みを紹介します。これは私が何年前か前に行っていた研究で出会った場です。私の当時の研究はブレインストーミングを効果的に行うための設備や機能はどういうものかというものでした。ブレインストーミングとはいろんなアイデアを好きに出し合い、突拍子もないアイデアでも否定せずに、とにかく多くのアイデアを出すという方式の会議を指します。こういう会議を効果的に行う施設をつくっているところはないかを調査していくうちに、フューチャーセンターに出会いました。このフューチャーセンターというのは、簡単にいえば「対話のための専用空間」であり、「人と人のつながり」でもあり、「企業や社会の変革装置」でもあります。企業もモノを売るだけではだめだということは今や常識になっているわけなんですけれども、企業がどうやって社会貢献するかということを考えなければいけない。それは一つの企業だけではできないので、企業がみんなと一緒に考える場が必要だということで登場したのがフューチャーセンターです。企業には会議室がありますし、公共の場所だったら公民館がありますが、そういう単なる空間ではなく、もっと議論しやすい場を考えようというのが、フューチャーセンターなどを考えるきっかけでした。

フューチャーセンターがどんなものを一言で説明するのは難しいのですが、同じように一言で説明するのは難しいけれども、皆さんがよく知った概念というと学校です。学校とは何かといったときに、施設という回答があるかもしれません。しかし、施設だけが学校じゃないですよ。学校には校舎があり、教える先生がいて、学ぶ生徒がいる、教育目標があるし、課外活動もある。建物でもあり、設備でもあり、組織でもあり、施設でもある。こういういろんなことが複合的に混ざって「学校」という概念を形づくっているわけです。フューチャーセンターも同様で、施設でもあるし、組織でもある。快適な空間で対話をしながら、新しいアイデアをみんなを出し合うという場、そういう総合的な概念をフューチャーセンターと呼ぶわけです。

フューチャーセンターを最初につくったのはスウェーデンのレイフ・エドヴィンソン (Leif Edvinsson) という人です。北欧はアメリカとかに比べると資本や資源は少ない、だけど、われわれは大きなポテンシャルをもっているはずで、それは知的資本だとエドヴィンソンは考えたそうです。スウェーデンの経営者たちが同じように考えてくれて、知的資本の活用をみんなで考えるにはどうすればよいのか、じゃあまずは話をしよう、経営者たちを快適な湖畔のコテージに集めて話し合ったのが、最初のフューチャーセッション、つまり対話の場であったということです。それがやがてヨーロッパのパブリックセクターの人たちも、それいいじゃない、われわれもいろんな人たちと話したいと思っていったんと言っ、ヨーロッパに広がっていったということです。さっきちらっと出た知的資本ですけれども、知的資本というのは人的資本、構造的資本、関係性資本の三つから構成されます。人的資本は人の成長、構造的資本はアイデア創出、関係性資本は人と人のつながりを指し、それをみんなで育ててゆくための場がフューチャーセンターであったということです。ヨーロッパから少し遅れて、日本でもフューチャーセンターが設立されました。一番古くて有名なのは富士ゼロックスの KDI というところです。

先ほどフューチャーセンターは対話の場であると申し上げましたが、そういう対話をフューチャーセッションと呼んでいます。フューチャーセッションでは、こういう問題がある、こういうことをみんなで解決してゆかないといけないと最初に提案する人がいます。そういう熱い思いがフューチャーセッションの始まりです、太田さんのように非常に熱い思いをもった人が多くの人たちを巻き込み、一堂に集まってゆく場がフューチャーセッションです。しかし、単にみんなで集まって話し合おうといっても、なか

なかうまくいきません。そのときに重要な役割を果たすのがファシリテーターという役割です。ファシリテーターは単純には議論をうまく進める人みたいにとらえられがちなのですが、フューチャーセッションにおけるファシリテーターというのは、単に議論を進めるだけでなく、自らその問題に関心を持ち、人との関係づくりを行ってコミュニティをつくり、問題解決方法を探っていくディレクターみたいな役割です。太田さんの活動はまるでディレクターみたいだなと、太田さんの話を聞きながら思っていました。

さてここで少しコミュニティの話をしていきます。フューチャーセッションにおいても図書館においてもコミュニティはとても重要だからです。コミュニティという概念は簡単そうでいて非常に難しい概念で、これこそ永田先生に講義していただきたいぐらいなんですけれども、コミュニティというのは、辞書では共同体のことであると書いてあります。典型的なのは地域コミュニティで、地域の共同体だと書いてあります。そのほか、文化コミュニティ、学校コミュニティなどたくさんのコミュニティがあります。大きいものとしては社会も一つのコミュニティです。これからの社会は「コミュニティの生成力」が成功指標になるのではないのでしょうか。社会変化というのは複数のコミュニティを介して伝播してゆくの、コミュニティを発見し、可視化して実体化して、活性化するということがイノベーションにおいて重要だと思われれます。

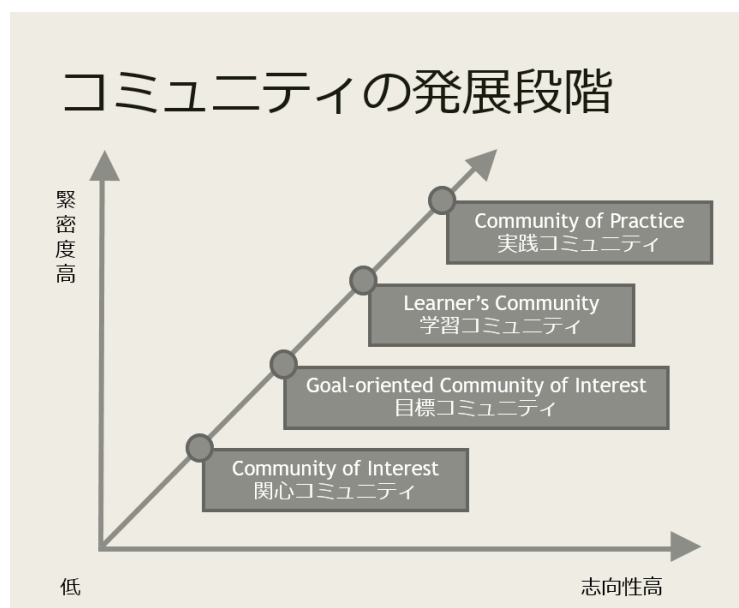


図6 コミュニティの発展段階

コミュニティに関する研究はたくさんあって、図6はアンリ（France Henri）という教育学の人の論文のなかに出てくる、コミュニティの発展段階を示しています。関心コミュニティというのは、なんとなく同じような関心をもっている人たちが集まったもので、それがやがて一つの目標を共通にもつようになると目標コミュニティになります。次にその目標を達成するためにはどうすればいいのかを学習してゆく段階が学習コミュニティです。最後の段階は学習したことをもとに、目標を実現すべく実践してゆくのが実践コミュニティです。まあ、こんな簡単にはいかないと思いますが、イノベーションのためのコミュニティモデルとしてはわかりやすいと思い、紹介しました。

フューチャーセンターに話を戻します。調査したなかで一番大きいのがオランダの LEF (<https://ww>

w.rijkswaterstaat.nl/zakelijk/innovatie-en-duurzame-leefomgeving/lef-future-center/index.aspx)で、あとデンマークのマインドラボが有名です。なので、この二つを実際に見に行きました。これはちょっと変わった色使いの部屋です（図7参照）。これがLEFのなかで目玉的な部屋なんですけれども（図8参照）、これ部屋はどれくらいの広さでしょう、このホールくらいかもしれません、この部分はこのホールのスクリーンよりもずっと大きいスクリーンがはってあって、横の壁も全部スクリーンです。リアプロジェクターで投影されています。あと床にも投影されています、いわば全部がディスプレイのようなものです。部屋中にいろんなものを映し出し、その映し出されたものが刺激になって議論が活性化する部屋です。これなんかはそこでボートに乗っているような感じですが（図9参照）、部屋の雰囲気がどんどん変わっていきます。例えば、砂漠になったり、森のなかになったり。つまり仮想的な空間をつくり出し、体験できるようになっているわけです。今だんだん8Kのディスプレイが登場していますが、この部屋も8Kになると、本物と見分けがつかない空間になってゆくと思います。

こういう巨大な設備をみると、そんなお金ないよと感じるかもしれませんが、これは世界でも最大規模のフューチャーセンターだからこういうことをやっているのであって、フューチャーセンター全てがこういう設備をもたないといけないというわけではありません。大胆な発想で空間づくりをしている設計の例として見ていただければと思います。お金がなくても議論が活性化する空間づくりは工夫次第でやりようはあると思います。空間づくりはこのぐらいの大胆さが必要なんだという目線で見いただければと思います。



図7 (Source : Rijkswaterstaat)



図8 (Source : Rijkswaterstaat)



図9 (Source : Rijkswaterstaat)



図10

これは私が訪問したときの写真ですね（図 10 参照）。右端に立っているのが私です。ここにもいろんな絵が出るんですけども、「なんか関係のない絵が出ているみたいだけど」と質問したところ、「物事を考えるときはいつも同じような情報に囲まれているだけではインスピレーションは生まれません。むしろ関係のないものを出すことによって、普段考えないような脳の回路が使われる。だから関係のない絵を出すというのはとても意味があることなんだ」という説明をしてくれました。

日本のフューチャーセンター、富士ゼロックスの KDI (<http://www.fujixerox.co.jp/solution/kdi/>) も訪問しました。KDI はちょっとした会社のミーティングエリアに、簡単なホワイトボードとかポストイットとかテーブルが置いてあるだけで、設備自体はいたって普通です。それでも入った瞬間、気持ちが高揚するような空間づくりがなされていました。いろんなフューチャーセッションが開かれていて、ポストイットを貼ったりして議論するんですけども、そこで終わりなんじゃなくて、ポストイットを貼ったパネルをちゃんと保存しておいて、次の会議にちゃんとそれと同じものを出してきて、すぐさまフューチャーセッションの続きをできるようにしていました。あと、「オランダの LEF はデジタルデバイスを使っているいろんなことをやっていたんだけど、そういうのはどう思いますか」って聞いたら、KDI の人は、「われわれもデジタルデバイスはいろいろ試してみたんだけど、ポストイットに書くとか、ホワイトボードに書くというような、人間の自然な動作には追従できないので、自然なフューチャーセッションをするには不十分だ」みたいなことをおっしゃっていて、オランダの LEF と富士ゼロックスの KDI の対比はおもしろいと思いました。

KDI は日本の代表的なフューチャーセンターですが、日本には他にこれだけのフューチャーセンターがあります（図 11 参照）。

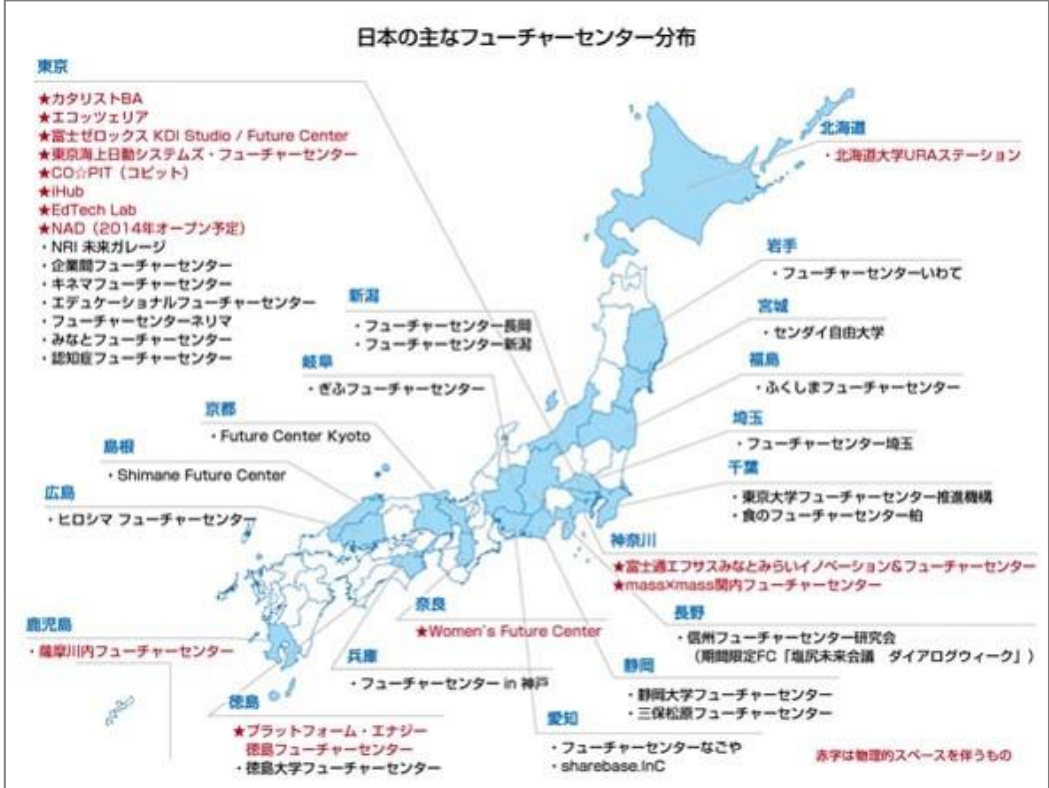


図 11 日本の主なフューチャーセンター分布（出典：フューチャーセンター研究会）
http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1409/24/news042_2.html

フューチャーセンターの要素は四つあって、一番目はファシリテーター、二番目は方法論、三番目が空間、四番目がホスピタリティです。ちょっとわかりにくいかもしれませんが、単純に快適な空間があるだけでは、フューチャーセンターとしては成り立たなくて、人々が気持ちよく議論するように、ファシリテーターが、ひとりひとりにちゃんと目を配って、発言していない人には発言を促すとか、暗い顔をしている人がいたら休憩時間に声をかけるとか、疲れている感じになったらコーヒブレイクを入れるとか、そういうホスピタリティを発揮することが重要です。ただ、ホスピタリティというのは難しく、こうすればおもてなしになるといったことではないんですね。相手を思いやる心が先にあって、結果として行動にあらわれるというか。形だけコーヒを用意してもおもてなしにはなりません。それから次に方法論についてですが、フューチャーセッションは対話なんですけれど、単に喋ればよいわけではなく、未来志向で考えないといけません。単にお喋りだけして今日はなにも結論が出なかったというのではフューチャーセッションの甲斐がないので、最終的になにを目標に議論をしているのか、今日はどの段階まで進んだのかということと一定の方法論ののっとなってやる必要があります。この手の方法論として有名なものに「デザイン思考」があります。一度調べてみるとよいと思います。

さて、残り4分となりました。話を最初に戻します。私は未来の図書館を考えるうえで、図書館だけで考えるのではなく、みんなを巻き込んでゆくという視点を提示し、じゃあ図書館はどんな場になればいいのかということを考えていきたいと思います。ということでフューチャーセンターの話をしました。太田さんの話にもあったように、図書館のなかの問題を解決するために図書館があるのではなく、みんなを巻き込んで社会を変えるための図書館であるということですね。私がフューチャーセンターの話をしたのは図書館をフューチャーセンターにしろという単純なことではありません。図書館というのは地域に密着し、市民に情報を提供していますが、その本質は市民の人たちと一緒に幸せになろうということだと思います。だから図書館というのは、本来市民の人たちを巻き込んで一緒にゆくポテンシャルを持っていると思います。そうすると、図書館は情報を提供するだけでなく、対話の場としても機能する必要が出てきて、フューチャーセンターの機能を図書館に取り込み、図書館のサービス機能とミックスすれば、あら不思議、社会を変革するような新しい図書館の姿が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。ただ、フューチャーセンターと図書館には違いがあるので、フューチャーセンターの機能を取り込むときはその違いを意識する必要があります。

もう時間がないので、フューチャーセンターと図書館の違い(図12, 13参照)を一つ一つは説明しませんが、簡単に説明しておくと、フューチャーセンターは対話する場、図書館は情報を提供する場です。場の活動の強弱を比較すると、フューチャーセンターのほうが動きが激しくて図書館は動きがあまりない。それから図書館にはサービスの型があるが、フューチャーセンターは型がない。あと、これも違うかなと思っているのは、図書館は繰り返し訪れる場であり、滞在する場でもあるが、フューチャーセンターはわーって集まってきてわーって議論して、終わったら解散するという通り過ぎていく場。次が協力度で、図書館協力の仕組みが確立しているのは図書館の強みですね。最後にコミュニティの発見可能性の違い。フューチャーセンターと図書館のコミュニティの発見のありようとはなにか違いがあるような気がするのですが、それをうまく言葉にできないまま力尽きたような感じがしています。この辺はきっと永田先生がうまく話してくれます。

というわけで、まとめとしては、私のなかで完全にまだはっきりとした姿を描いたわけではないんですけれども、ソーシャルイノベーションという視点を導入することによって、図書館の新しい姿が必然的

に浮かび上がってくるという確信をもっています。

だいたい時間ですので私の発表は以上とさせていただきます。

フューチャーセンターと図書館の比較

- 場（活動）としての性格：
 - フューチャーセンターは対話する場
 - 図書館は情報提供（資料提供）する場
- 活動の強度
 - フューチャーセンターは動きが激しい
 - 図書館は動きがあまりない
- 活動の性格
 - フューチャーセンターの活動は自由
 - 図書館はサービスの形がある程度定まっている。
- 寄り合い度
 - フューチャーセンターは人々が通り過ぎていく場
 - 図書館は繰り返し訪れる場、もしくは滞在する場

図 12 フューチャーセンターと図書館の比較（1）

フューチャーセンターと図書館の比較

- 協力度：
 - フューチャーセンター同士のネットワークは弱い
 - 図書館同士のネットワークは強い
- 多様性
 - 目的をもって対話するのはよいが、意見が偏る可能性
 - 多様な人々が同時に多様な資料を入手し、学習している
- コミュニティの段階
 - フューチャーセンターは目標コミュニティからはじまる
 - 図書館は関心コミュニティにとどまっている（ようにみえる）
- コミュニティの発見可能性
 - フューチャーセンターは
 - 図書館は

図 13 フューチャーセンターと図書館の比較（2）

（永田）

ありがとうございました。お二方、発言者の方々大変ありがとうございました。時間もぴしっと合わせていただきまして。

皆さま、それでは 20 分休憩です。正確には 19 分くらいかもしれません。お手元の資料のなかに、質問の用紙がございます。ぜひ、ご質問がある方はそれに書いてですね、後ろの受付のほうで、受け付けておりますので、お使いください。それでは、お茶のご用意もあるようですので、少しリラックスしていただければと思います。では、休憩に入りましょう。

ディスカッション

(永田)

ディスカッションに入りたいと思います。その前に一つご紹介しておきますが、後ろのほうでお二人の方が、模造紙に向かってなにか書いている、なんだろうなと私もみていたんですが、墨田の(図書館)パートナーズの北村さんと小田垣さんが、このシンポジウムの梗概というのかメモというのか、そんなのを描いていらっしゃるようです。たぶん後からみせていただけたらと思いますので、楽しみにしています(末尾の図 15 参照)。

では、ディスカッションに入りたいと思います。質問にまずお答えして、話をつなぎ議論に入ってゆこうと思います。最初の、まず太田さんに、こういう質問がきています。「今回のお話はまわりの人をどう巻き込むか、いかに多く巻き込むかが肝になっているように思いますが、特に幕別の場合、どのようにして地域の人を巻き込んでサポーター育成や、手渡しでの本の移動を実現させたのでしょうか」。また、茂木の話では、「図書館からの発信なのか、地域のインフルエンサー(影響力を与える人)のような人に発信・協力してもらうのか、効果的と考えられる方法はどれでしょうか」という質問です。お答えいただけますか。

(太田)

すべての地域に汎用的に使える方法はあるのかって言うと、そんな便利なものはないと思います。地域地域でそれぞれやり方は違うと思う。特に幕別町っていうのは十勝なんですけど、「十勝モンロー主義」という言葉があってですね、非常に排他的なところがあって、よそ者がくるとなかなか動かないみたいな、自分たちが御山の大将だみたいな。皆さんおっしゃいます、「十勝モンロー主義」っていうのがあるって。そういうなかで、徹底してまずやったのは、地元メディアとの連携。あと、特に幕別町の場合はホームページ、図書館のホームページを充実させてゆく。それは、図書館員の人もがんばるし、そのホームページをつくるプロセスに人を巻き込んでゆく。情報発信、情報発信といわれますけども、私は情報発信が大事なのではなく、情報発信するコンテンツをつくるプロセスに人を巻き込んでゆくのが一番早いと思っています。そのために、お話した図書館エディター、「まぶさ」の男、「まぶさ」の女たちを編集力養成講座という形で集めました。あるいは、「あなたの本棚をみせてください」という形で、あのようインタビューに行って、メディアをつくる過程に巻き込んでゆくっていうやり方をとりました。山本商店という図書館の裏の商店なんですけど、そこのおやじを引っ張りだして、最終的にはその人がまた「まぶさ」になって、図書館づくりにかかわってくれるっていうような循環をつくり出しています。そうやって人を集めるためには、さっきいったように既存のメディアも使ってゆかなきゃいけないので、十勝毎日新聞の記者さんも北海道新聞の記者さんも「まぶさ」のメンバーに引き込みました。同じように編集力養成講座に出ていただいて、いっしょに企画をやってゆく。だからチラっとおみせしたハンセン病の展示会も、そのメンバーが中心で企画をつくって、一からやってくれていますし、最近そういう企画展がいろいろ回り出しているようです。ただ、まだまだ幕別町は、地域住民のまちづくりそのものに図書館が核になって動き出しているというところまでは、いけてないと私は思っています。図書館のなかで「まぶさ」の人たちががんばってやってはくれていますけど、実は役場のなかでそれがまだ理解されていない。最初の長谷館長さんはあれだけ懐の深い方でしたから、相当役場からいろんな圧力があつたのをカバーしてくれています。今は定年退職されて、お孫さんと遊んでいますけれど、そのあとを継いだ林館長さん

も随分がんばってくれました。ただやっぱり、3人目となると、この8月に突然人事があつて変わりました。そうすると、ちょっと切れてきたかなど。この5年間の流れがね。これをどうやって継承していくか。ここで「まぶさ」の皆さんたちが、続けて図書館を支えていってくれるのかっていうのは、これからだと思います。そのように行政っていうのは、館長さんが変わったりだとか、首長さんが変わったりするところがらと変わることがあるので、この継続性が一つ問題かなと思います。

茂木の場合は、もともといろいろなボランティア団体とかよみきかせの団体とかがたくさんありましたので、そういうところのリーダーの人たちを最初集めてコアメンバーをつくって、「ふみの森もてぎ引っ越し大作戦実行委員会」っていうのをつくって、20人くらいのメンバーを固めました。その人たちで350人集めて、あのような引っ越し大作戦をやつて、最後はみんなで記念撮影をして、みなさんはこれから、ふみの森の「こだまの会」の会員になるんだよっていうので、少しずつ形を作つていった。だから茂木のほうが、そういう町民の引き込みはできていると思います。ただ茂木は一から新しい図書館つくつたのでやりやすかつたと思いますが、幕別町は既存の図書館イメージがあつて、後からシステム改修の機会に入っていているので、地元メディアだとか、いろいろ駆使しながら、じっくりつくつてゆく必要があるかなっていうふうには思っていますけど。

(永田)

はい、ありがとうございます。同じように太田さんへの質問がさらに二つほどありまして、一つは、「業務委託や指定管理など、権能の限られた図書館スタッフが、新しいしくみや試みを行うには、地方自治体のなかに味方となってくれる賛同者や応援してくれる人が不可欠となると感じています。そのような味方をつくる方法、コツなどがあれば」伺いたいとか、「貴重なお話ありがとうございます。幕別町の市民にみられる変化をお聞きしたいです」というものです。まずは、前のほうの話ですね、自治体のなかに味方をつくる方法、これを一つお教えいただけますか。

(太田)

これはまあ指定管理の人は大変だと、私、一昨日に実は九州から帰つてきたんですけども、福岡から宮崎、大分回つて、また福岡に戻つて、一週間いろんな図書館で、最近九州からすごい相談がくるものから、その多くがやっぱり指定管理の図書館さんで、今日はソーシャルインベーションっていつてますけど、こういう「まちづくり」とかそういうもので、もっとまちとの関係をつくつていきたいんだけど、どうしたらいいのっていう相談がものすごく多くて。で、その役場との関係、特に指定管理の方って予算がもう決まっちゃってますから、これでこれをやりなさいって仕様も固まっている。そのなかでやつてゆくのってすごく大変だと思いますけれども、さっきいった「今だけ、金だけ、図書館だけ」じゃないですが、要はすべてのことを、さっきの引っ越しの例じゃないですけど、お金でまず考えちゃうんです、予算がないからって。まず最初に予算の話が出てきちゃうでしょ？予算がないからできない。人がいないからできない。だけど、予算や人の話にしないでやるという方法や、アイデアはいくらでもあるはずなんです。まずそこから入っちゃうから動けなくなる。茂木の引っ越しの話もそうですよね。じゃあ、みんなで並んで本運んだらおもしろいんじゃないのっていったら、「えええ?!」ってなりますよね。でも実際やり始めてみると、いろんなことが起こるんですね。だから、まずお金と人の問題で片付けられないことだと思います。じたばたしてみる、っていうのが一番大事だと思う。あと役場の方との関係って、これが一番難しいと思います。指定管理に限らず、各地の図書館をお手伝いして、ものすごく感じます。役場と図書館の溝。これはもう一つずつやつていくしかないですね。既存の図書館と役場とのコミュニケーシ

オンラインに頼ったり、そのコミュニケーションラインにがっかりしたりしないで、一つずつルートをつくってゆくしかないと思います。役場のなかに、他の課でもいいんですよ、教育委員会や生涯学習課とかだけじゃなくて。あんまり大きな声でいえないですけど、教育委員会はなるべく頼らないほうがいいかも（笑）。建前論が出てきちゃうので。建前論が出てきたときは、無視したほうがいい。別のルートでよくわかっている人がいるはずですから。今あの、ちょうど（客席の）真ん中で笑っている、北海道の札幌の「ちえりあ」という生涯学習総合センターから担当の方がいらっしゃってますけど、実はこないだ幕別でやったあのハンセン病の企画展を札幌市の中央図書館でやろうと思って、いろいろ館長さんもご尽力いただいたんだけど、改修工事と重なったりして図書館ではできなくなったときに、その「ちえりあ」での開催が実現した。そういうほかのルートで実現しながら、じわじわまた、中央図書館に足掛かりを一個一個つくってゆくというように、そういう遠回りをしたり、道草したり、寄り道したほうがいいです。まっすぐに、教育委員会の案件だからって教育委員会に通して動かそうとしていると、たぶん動かないと思います。だからそのときに、やっぱり図書館のシンパになってくれる人がいないとダメなので、とにかく役場の人に図書館に足を運んでもらうのが大事だと思います。そのためには、選書からやり直さなければだめだと思います。役場の職員が読みたい本がありますかっていうところですね。そういう本がもし置ければ、呼んでこないとだめですから。今度こういうのを企画で使ってくださいよと、そういうことを一個一個積み重ねていかないと、役場と図書館の溝は、埋まっていけないと思います。有名なのは鳥取県立図書館ですよ。片山善博先生が鳥取県知事時代に一番最初にやったのは県議会の議事室を出たすぐのところの本棚を置いたんだそうです。それで、その日議論された内容に合う本を司書さんに並べさせた。議会が終わって、議員さんたちが出てきたときに、もう議題になった関連本が置いてある。そういうのを徹底してやったと片山先生はおっしゃってました。それで議員さんたちに図書館ってすごくなって、そこから政策の相談、資料の相談とかを受けるようになって少しずつ認めさせて、図書館の予算を少しずつ獲得していったっておっしゃってました。そういうあいだの埋め方っていうのはいくらでもあるので、それを諦めずにやっていくことだと思います。

（永田）

ご質問なされた方、よろしいですか。大変説得力がありますよね。永田が、指定管理であろうが、あるいは直営であろうが同じだと説明したのではとても信頼されないんですけども、彼がいうと皆さんも納得してくれると思います。大変おもしろい話をいただきました。それで、この延長で、幕別の市民にみられる変化をお聞きしたい、エピソードを一つおっしゃっていただけますか。

（太田）

市民の方に変化っていうか、なんていったらいいんだろうな、その成果をあせらないことが一番大事だと思うんですね。必ず徐々には浸透していきますので。さっき配ったプロフィールにも書いてあったと思うんですけども、僕はもともと市民電子会議室、1995年に阪神淡路大震災っていうのがあって、その年が日本のインターネット元年なんですよ。そのときに、電子コミュニティを使って、地域の壊れてしまったコミュニティを再生できるんじゃないかということで、日本でインターネットをつかった市民電子会議室の草分けになった実証実験を藤沢市と桐生と淡路島でやったんです。それが95年です。そのあと藤沢市が、市民電子会議室を正式に立ち上げて、15年間私はそこの世話人やりました。そのときに、徹底してコミュニティづくり、新しいコミュニティってどうやってつくったらいいんだっていうのをやりました。そこで口をすっぱくして、藤沢市の人とか、札幌でもやりましたし、豊橋とか日本中でやった

んですけど、口をすっぱくしていていたのが、「あせらず、あわてず、あきらめず」。もうこれに尽きると思います。そう簡単には効果は出ないですから。でも、あせらないで、あわてないで、こつこつやっていたら、必ず広がっていきます。幕別の場合ですと、さっき、ちらっとみせた落語会、最初やったときは、たぶん60人くらい座席置けたのかな。私は、ホールや公民館を借りてとか絶対やらせませんから。図書館のなかに特設の会場つくって、ありったけの椅子を集めさせて、形なんかそろってなかったりします。そんななかでやるんですけど、最初の一回目の落語会はたぶん、30人くらいしか来なかったかな。でも、あきらめず四回やっていたら、四回目はどうなったかっていうと、立ち見の人も入れなくて、150人くらい来たのかな。そうやって続けていけば、必ず反響が出てきます。そしたら、今度は市民の人から、町民の人から、もっとこういう落語が聞きたいとか、こういうことやって欲しいっていうの出てきます。そうやってあきらめずに続けることしかないと思います。コツはね。例えばイベントで一人しかお客さんが来なくても、そこでやめたら終わり。とにかく続けることだと思います。

(永田)

ありがとうございます。今日の一つの収穫はこのあたりだと思います。いただいた質問に対してお答えをいただいておりますが、フロアでこのあたりのことをお聞きになりたい、あるいは議論したい方はいらっしゃいますでしょうか。いかがですか。遠慮なくおっしゃってください。

さらに、同じような質問もう一つ続けます。「図書館で地域が変わるという考えを、大都市圏、例えば千代田区で実践することは難しいように感じてしまいます。その場合、コミュニティの創出により地域貢献をすることも可能とは思いますが、アイデアがあればご教示いただきたい。」

(太田)

大都市圏って、まず図書館さん、おそらく日常の業務に追われまくっているんだと思います。ものすごい量の予約がくるし、返却本はくるしっていうことですかね。確かに難しいと思います。けど、その難しいとおっしゃっている、理由がなんなのかですよね。僕は、その難しいと思っている最大の理由を、プラスにしたほうが良いと思うんですよね。さっきいったように、地元の本屋さんで本買おうとしたら装備がネックで、本屋さんをお願いしたらかえって迷惑かけるからやめようっていったら、そこで終わっちゃうんですよね。実際そこで終わっちゃってます。だったらその最大のネックになっている1冊二百何円の装備代を、武器に出来ないかっていうのが最初にやった発想なんですよね。だから同じように、なぜ都会の図書館だったらコミュニティづくりができないと自分が思っているのか、じゃあその最大の理由はなんなんですかって考えたときに、それが武器になる方法がきっとあるはずだと思います。それはきっと、既成のやり方だとできないと思います。一回既成のやり方を全部取っ払って、そこに直接図書館がやらなくていい方法、人なのか物なのか事なのかをもち込めば、なにかできるはずなんですよね。それを考えたほうが良いんじゃないのかなって思いますけど。

ただ、おっしゃるように都会の、特に東京の図書館は大変だと思います。ただ、あまりにも頭っから指定管理、業務が大変だから指定管理って思いすぎているんじゃないのかなってちょっと思いますけど。できることはまだまだいっぱいあると思います。

(永田)

ありがとうございました。大都市圏でも、コミュニティ創出のために図書館の応援団がいろいろつくられています。さきほど紹介しました図書館パートナーズさんはその一つで、自分たちでコミュニティを支え図書館を動かしてゆこうとしている人たちですね。どうしたら、今この話題に対して、どんなこと

をなさっているか、あるいはどういう趣旨でなさっているかなどを、うかがいたいです。突然ですみません。

(北村)

はい、突然ですが、墨田区のひきふね図書館というスカイツリーのそばで、イベントボランティアをやっているんですけど、そうですね、確かに今日のテーマと同じで、私たちもやっぱり地域にコミュニティをつくりたいと思ってやっている活動で、結構イベント、いろんな多種多様なものを行っているんですけど、変わったところでゆくと、例えば、自転車の輸行方法（注：公共交通機関（鉄道～船～飛行機など）を使用して、自転車を運ぶこと）をね、図書館で教えますとか、テントの張り方教えますとか、浴衣の着付け教えますとか、なんかそういう普段一見図書館ではやらなさそうなことをやることによって、普段図書館に来ない人呼び込む、で、そこに呼び込むことで、そこに図書館をきっかけとしてコミュニティをつくりたいということでやっています。ご質問にあったどうしたらいいのかっていうところなんですけど、確かに墨田区の住民って墨田区全体だと27万人近くいますので、ちょっと27万人のコミュニティはつくれないと思うんですね。でも、近隣の同じ興味のある人どうしだとか、あと、やはり地域のなかに地域をよくしたいと思っている都会の人たちもいますので、そういう人たちとつながってゆく。で、つながってゆくときの肝といいますか、コツというのは、お客様扱いしないというか、つい図書館って、図書館で働く人と来る人をお客様としておもてなしするっていうことで、そこで分断されてしまう、全然立場が違ってしまいうんですけど、同じ仲間として、地域をよくしようという同じ目的をもつ同じ仲間として付き合っただけってところが、私はコツだと思っているので、私自身も納税者であり、市民であり、利用者なんですけれども、図書館サービスの受け手ではなく、受け手でもあり担い手でもあるっていう意識でやっていますので、そういう人たちとつながってゆくために図書館の方々にやって欲しいことといえば、そうですね、話しかけて欲しい。図書館に行って、結構目も合わないっていうことよくあるんですけど、明らかに探していて、助けて欲しいなっていうときに、目も合わないとか、話しかけてもらえないと、そこが一番最初のきっかけとなると思いますので、私としては、まず第一歩としては、目を合わせ、話しかけて、人と人とのコミュニケーションをする、というところからではないかと思います。よろしいでしょうか。

(永田)

ありがとうございました。突然振りまして、申し訳ございません。

(太田)

あの、一つフォローすると、コミュニティづくりの三要素というのがあって、ツールとルールとロールなんです。これ編集工学で「ルル3条」っていうんですけど、ツールとルールとロールをどうやって作るか、ツール、これ思いがけないものがコミュニティづくりのツールになりますから、だから、例えば幕別の例だと、ストレス測定器がコミュニケーションツールになっています。あれで、ストレスがあった、なかったっていうので、会話が始まって、それぞれの趣味だとか、家庭事情がわかって、それを核にコミュニティに持ってゆっただけっていうことはできます。だから、なにがツールになるかはわからない。例えば、田原市（愛知県）さんなんかは古い昭和の小道具をたくさん用意して、回想法とかに使っているんですけど、そういうものがコミュニティのツールになる可能性もあるし、私がいった幕別町の例は、メディアをツールにしようとしています、メディア制作の過程を。あと有力なのは本棚だと思っています。本棚、特集棚を一部任せる。特に日本中の図書館、理科の本棚がなくなっているから。司書さんに理系の人があ

まりいないんでね。私は、もともと理科の先生ですから、生物教えていたんで、もう理科の本棚行くのが
っかりするんですけど、どこの図書館に行っても。そういうのを、地元の中学の理科の先生と組んでやっ
てもいいと思うんですよ。そういうところからコミュニティづくり、まずツールはできると思います。
で、次はどこにどういうルールを発生させるか。これ、なるべく変なルールのほうがいいです。昔コミュ
ニティづくりで、私、経産省と総務省がいっしょにやらなきゃいけないコミュニティづくりをやったこ
とがあるんですけど、仲が悪いんですよ（笑）。もうネット上でケンカばかりする。そのときに、す
ごいルールつくりました。一番最後に必ず「うふふ」って入れなさい（笑）。「あなたのいってることはお
かしいですよ！うふふ」、ケンカにならないんですよ。どうやってそういうおもしろいルールをつくって
いけるのかっていうのが、コミュニティづくりのポイントになってくる。昔、大阪の箕面市でやったとき
は、ピンバッジをつくりました。もうみんなそれ付けるのがうれしくて、コミュニティができてしま
した。だから、そういうツールとルールをどうやってつくるか、どうやったらそのバッジがもらえるか
というルールをどうつくるか。あとはロール、役割分担です。これが最終的には、一番大事になります。継
承してゆく役割をどうつくるのか。ヒエラルキーだけではないですから、ロールのモデルはいっぱいあ
ります。「俺についてこい」みたいなロールもあるし、「料亭のおかみ」ロールとかもありますから、全部
仕切っちゃう人ね、「はいはいはい、あんたあっちね、あんたはこっちね」、「はいはい、座りなさい座り
なさい」ってね。そういう、いくらでもロールのモデルはありますから。そういうツールとルールとロー
ルをつくれれば、コミュニティっていうのは、おのずとできてくると思います。

（永田）

ありがとうございました。服用すると効くような気がします。

この話に関連して、図書館員はその任務をどのようにとらえられるのかという話を少しさせていただ
きたいと思います。というのは、今の話はいわば「巻き込んでいく」という話ですが、図書館員はそも
も自分たちの役割をどういうふうにとらえているかということ、少しおさえておきたい。

このシンポジウムのテーマを決めたあと、図書館とソーシャルイノベーションに関してペーパーが存
在するかどうかを調べました。ほとんど見当たらなかった。しかし一つだけ発見しました。「ソシヤル
イノベーションの触媒としての公共図書館」という論文でした。オランダ南部のティルブルフというま
ちにある、コミュニティセンスという名のコンサルタント会社で働くデ・ムーア（Aldo de Moor）とい
う人と、同じくコンサルタント会社キュービスのバン・デン・アッセン（Rutger van den Assem）とい
う人が共同で、2017年にイタリアのプラトで、発表した会議論文でした。なかなかおもしろかったので、
ここで紹介します。

オランダの公共図書館はすばらしいですから、彼らは停滞した図書館をみているわけではないです。
ただ、これまで物理的なコレクションに焦点をおいてきた図書館は、情報ネットワークやデジタル情報
が進展する知識社会では、もはや余計なものとなみなされる危惧があるし、図書館のデジタル化の拡大は
受け入れざるをえないけれども、印刷物も重要だと感じている利用者も存在する。そういう矛盾した状
況において、今後図書館はどうするのか、そのためには図書館の役割をもう一度きちんとおさえないと
いけないのではないのか、というのが彼らの問題意識でした。そこで、図書館は社会に対してなにがで
きるかという点かという点を図書館員に議論してもらった。いいかえれば、「ソーシャルイノベーションに図
書館が役に立つのかどうか」っていうことを考えてみようというワークショップを行ったのです。そこ
で、図書館の人たちに自分たちがどんなサービスをしているかというのを挙げてもらった。

公共図書館のツールボックス

センスメーカー

社会的文脈からもっともなイメージを構成する、進行中の回顧的(そして将来的)な意味づけ[カール・E・ワイク]

身の回りで何が起きているかを、能動的に意味づけること

センスメーカーとは次の特性のプロセス

1. アイデンティティ構築に根づいた
2. 回顧的
3. 有意義な環境をイナクトする
4. 社会的
5. 進行中の
6. 抽出された手がかりが焦点となる
7. 正確性よりもっともらしさ

経営学: 人々に対して、現在と将来のありかたについて意味を与える
 (1) 魅力的な策略の創発
 (2) その自己の解釈に即した、積極的な行動

Roles	Tools	Services	Functions
<ul style="list-style-type: none"> - Collectors - Information professionals - Reading consultants - Storytellers - Media coaches - Product managers - Specialists/ advisors - Intermediaries 	<ul style="list-style-type: none"> - Apps - Dialogue tables - E-readers - Buildings - Local networks, contacts - Social capital (low barrier, trustworthy, independent, broad societal reach) - Newsletters - Knowledge & skills - Tempting presentations - Promotion materials - Streaming of content - Study cabins - Social media - Websites - Wifi - Devices - Digital databases - Digital display windows - E-books 	<ul style="list-style-type: none"> - Bookstart - Reading clubs - Lectures & activities - Internships - Study- and workspaces - Interest-based linking - Read-out sessions - Workshops & trainings - Delivery services - CPNB programs (nationwide literature promotion) - Social/cultural education - Services for kindergarten and boarding school education - "The building" (atmosphere) - Individual advice, personal contact (telephone, building, e-mail, social media) - Collection (digital/physical) - Expositions - Online meeting place - Place to "unwind" - Physical meeting place - Facilitating schools - Open writing podiums - Access to worldwide web - Promotion of reading - Organizing 	<ul style="list-style-type: none"> - Warehouse for knowledge and information - Centre of development and learning - Encyclopedia of art & culture - Source of inspiration for reading and literature - Stage for encounters and debate

<https://docslide.net/education/public-libraries-as-social-innovation-catalysts.html>

図 14 センスメーカー・公共図書館のツールボックス

(<https://docslide.net/education/public-libraries-as-social-innovation-catalysts.html>)

それを、Roles (役割) とか Tools (道具) とか Services (サービス) とか、Functions (機能) だとかにカテゴリ化したものが図 14 の右の表です。項目には、コレクションへのアクセス、質問に答えるなどさまざまなものがあがっています。そのうちで、二人がまず注目したのは、図書館は基本的に信頼を受けている、コミュニティから信頼を受けているという点でした。ソーシャルキャピタル (図 14 の Tools の欄にみられます)、つまり社会的な関係上の信頼資本を図書館は持っている点です。もう一つは、レファレンスサービスなどで、図書館員は利用者が知りたいことに対して、「こういう本がありますよ」あるいは「こういう見方をすると、こんな本が出ていますよ」と回答する支援の場面です。利用者は少し手に負えない問題について図書館に行って調べようとするわけですが、手に負えない問題の理解について、図書館員がなんらかの示唆によって手助けしている。それは、児童サービスの場面でもそうです。ストーリーテリングをやっているとき、ある種、現実の社会に対する一定の意味づけを伝える行為をしているといってよいでしょう。つまり図書館員たちは、社会のなかで一定の意味づけを人々に伝えているという点です。図書館には知識などの蓄積があって、そうした支援を行うと、市民、コミュニティに喜ばれるということ、この人たちはワークショップで発見したのです。

人々が現実を理解したいがために図書館に資料を読みにくる時に、なにか不明な点があれば、図書館員に聞いたりもするわけで、図書館員がやっていることは、人々のための意味づけではないかということ、これを彼らは指摘しています。つまり図書館員を、パブリックな、人々のためのセンスメーカーだというふ

うにこの論文ではみている。そして、公共図書館はそのような働きによって、ソーシャルイノベーションのための触媒になりうると位置づけています。公共図書館は、コミュニティの人々のために、自分たちのもっている力できちんと情報に意味づけをするサービスを展開してゆけばよいと主張しています。こんなサービス対応は、現場の皆様少し参考になるところです。

少し脱線ですが、この意味づけ、センスメイキングは、非常に重要な概念です。センスメイキングというのは、なんらかの能動的な意味づけをすることです。経営学のほうでとても有名になったのですが、この概念については図書館情報学も早くから取り入れていまして、ブレンダ・ダーウィン(Brenda Dervin)という情報の探索行動の研究者をご存知でしょうか。情報検索をしますと結果が返ってくるが、問題は検索者がその結果をどう理解するかであると、彼女はしています。つまり、情報を探すというのは、その自分が質問をしたものに、自分自身が意味づけするということになる。われわれは現実を理解するときになんらかの意味づけをしているというのです。

また経営論のほうでいうセンスメイキングという主張も参考になります。非常に有名な話ですが、ある二人のセールスマンがいて、そのセールスマンが未開の地に派遣されていった。靴のセールスマンだったのですが、そのときに、未開の人たちは全然靴を履かずに裸足で歩いていた。この現実を本社に報告する時、一人の方は、「とりあえず一万足即座に送ってくれ」といったんですね。もう一人の人はそうではなくて、「見込みなし、すぐ帰る」という報告をした。前者はですね、要するに、今後のその国の開発を見越して、そして潜在需要がありと考えた。後者のほうは、これまでの歴史からいってとても無理だろうと判断した。その結果は、どちらがよい成果を収めたかは、およそ想像できます。

センスメイキングというか、ものごとをどういうふうにつかむのかでこれほど違う。ある意味、まさに太田さんが先ほどからおっしゃっていただいたように、いろんな見方があって、つないでゆけるということなのです。そのあたりが太田さんのすばらしさであって、われわれは状況をどういうふうに意味づけているかということ、もう一度考えていただくと、よろしいかなと思いますね。

それでは、宇陀先生のほうへの質問があります。一つは「フューチャーセンターのような機能があるとよいという話をもっともだと思いが、図書館の利用者の多くは「図書館は静かな場」という認識の方が多く、ディスカッションをする雰囲気とは遠いイメージがある、参加者が集まらなさそう。私は、図書館はもっとうるさくてよいと思うのだが、ディスカッションのある図書館の事例があれば、おうかがいしたい。」

(宇陀)

この質問は、私のプレゼンの趣旨を改めて説明するうえで、とてもよい質問だと思います。先ほど申し上げたとおり、図書館の視点だけで考えるとそういう意見になるんですね。図書館はこうあるべきだから、そういうのは図書館じゃないという言い方になってしまうんですね。しかし、ソーシャルイノベーションという視点を入れると必然的に話し合う場が必要になります。話し合う場はどこでもいいといえどどこでもいいんですが、図書館というのはやはり地域における情報拠点であり、市民の活動の場であるとするならば、図書館のなかにディスカッションの場があるのは必然だろうというふうに私は思います。以前ブレインストーミングの研究をしているときは、フューチャーセンターを図書館にもっていても、「なにそれ？」と言われて終わりだろうなと思っていたんですが、今回永田先生から「ソーシャルイノベーションの視点で考え直してみたら」と言われ、改めて考えてみると、「フューチャーセンター」イコール「図書館」ではないんですけれども、そういう対話の場みたいなものは、図書館にあって然るべ

きだよなと思った次第です。さっきあちらのほう（北村さん）からも話がありましたとおり、図書館とみんなが対等な場で対話をするという視点に立てば、フューチャーセンターを図書館にもってくることは違和感がないのではないかと思います。そういうもののとらえ方の話の一つ。

二つ目は具体的なソリューションの話です。静かな場とガヤガヤする場は両立します。というのは、大学図書館のラーニングコモンズで既に先例があるからです。アクティブラーニングという言葉があるんですけど、先生から教えてもらうだけではなく、学生が自主的に議論しながら勉強する場が必要だよなということになり、ラーニングコモンズという場が登場しました。しかし当初は、図書館は静かにものを考える場所という考えが根強く、ガヤガヤする場所をつくることに抵抗がありました。それで、海外の大学図書館はどうしているんだろうと、永田先生と海外のラーニングコモンズを見に行きました。すると、サイレントエリアとガヤガヤエリアを分けている大学図書館が多く見られました。これをゾーニングといいます。ゾーニングを工夫すれば公共図書館でも両立すると思います。

でも大事なのも一つ目のもののとらえ方のほうです。ソーシャルイノベーションに必要な場はどんなものだろうかということです。空間ではなく場です。場とするためには、今までの文脈だと図書館じゃないけれども、ソーシャルイノベーションに対話の場は必要でしょうということになれば、図書館に対話の場をつくれればいいんです。

（永田）

ご質問なされた方、ご納得されましたか。この音の問題、いつまでも続きますね。でも、おそらく図書館はだんだんだんだん騒がしくなると思います。そして静かなエリアも必要ですので、それは確保されると思います。基本的に、特に公共図書館はもつとにぎやかであっていいと思うんですよ。私、最近、新しくできたところに行って、なんでこんなに静かなのだろうなと思いました。活性度が低いのかなと勘ぐってしまいました。

もう一つの質問です、「フューチャーセンターとしての図書館を考えたときに、「対話」というキーワードが気になりました。対話の相手は誰なのか。図書館の場合、一人での活動もあり得るので、自分との対話というシチュエーションも思い当たりました。生産性という観点ではあまり成果がないのかもしれませんが。」どうでしょうか、宇陀先生。

（宇陀）

フューチャーセッションに集まった人々どうしとの対話という意味です。図書館で内省的に自分自身に語りかけるというのはもちろんあるんですが、少なくともフューチャーセンターにおける対話というのは、フューチャーセッションに参加した人との対話という意味です。

（永田）

先ほど太田さんが、参加者一人でもイベントをやり続けなくちゃいけないみたいなことをおっしゃってましたね。対話性のあるイベントともあるでしょうか。対話を主にした。

（太田）

例えば、本棚づくりワークショップとかってというのは幕別町でしょっちゅうやっているんですけど、一つの例だと、皆さん好き嫌いあるとは思いますが、ビブリオバトルっていうのを初めて幕別町でやったときにですね、当時の教育長、今町長になっていきますけど、その教育長さんと、われわれがやっている改革にもものすごく足引っ張っていた副部長さんと、あと議会でもものすごく図書館応援してくれていた議員さんと、ものすごく足引っ張っている議員さんとがなぜかいて、四人でテーブル囲んでビブリ

オバトルやっていたんです。それをみて、まあたまたまそういう班になっちゃったんですけど、新聞記者さんがすごくびっくりして、喜んでいたんですけど、要はさっきいった、ルールをつくれればそういう対話は起こるんですよね。普段、図書館をめぐるケンカしている陣営が、そうやってお互いの本を紹介し合っただけで、ほほえましかったんですけど。だからそういう対話をつくる方法っていうのはあるとは思いますが。

(永田)

図書館の利用は、これまで資料と人を結びつける、オーソドックスなスタイルですよ。それに対して、コミュニティの人々が集まって、そして自分たちの問題だとか、趣味でもいいし、生き方でもいいし、そういったことを図書館という場で議論するというような利用、そうした形はまだ普及の度合いからいえば少ないような気がします。図書館ってコミュニティのためになにができてなんぼか、というわけですから、図書館という場をもっとさまざまに使っていいのではと思います。

日本の行政っていうのはすごく有能で、いろんなセンターをつくります。子どもが帰ってきたら学童保育とか、児童のためのセンターですとかね、あるいはコミュニティセンターとしての公民館とか、さまざまな施設がある。住民はそれぞれに対してイメージをもっていらっしゃいますけれども、生活はバラバラじゃなく一体性をもったものですから、もっとつながっていて欲しい。外国の公共図書館をみると、決してコミュニティセンターがないわけではないんだけど、包括的に図書館がコミュニティに関わるサービスを全体的に展開しているという感じがするんですよ。もちろん図書館は、情報に関するサービスがベースですけども、もう少しこういった機会(用途)に住民の方に使っていただけるような、つまり対話の機会をつくるサービスもしていいと、していかないと、進展がない気がします。

質問は以上でありました。皆さん、フロアのほうからご意見、ご質問ございますか。遠慮なさらずにどうぞ。

(質問者)

今日は大変素晴らしいお話をありがとうございました。ちょっと私の記憶のなかで確かではないんですけども、東京では公共図書館をNPO法人が指定管理でやっているところが多いと思うんですけども、確か小金井にある図書館で貫井(北)分室というところの田中肇館長という方がたぶんいらっしゃると思うんですけど、その方は確か図書館でそういう対話っていうか、そういうのをやっていたような気がするんですね。ちょっと今検索できないので確かではないんですけども、そのコミュニケーションをとれる場にしたいというのを八洲学園大学の公開講座で聞いたことがあるので、今宇陀先生がおっしゃっているようなことを具体的にやっているのは、そこなんじゃないかなというふうに思いました。

(永田)

コメント、ご意見ありがとうございました。おっしゃっているところが今日の話の粋だと思います。ですから対話の機会のある図書館がこれから増えてゆくだらうと思います。だんだんみなさんが欲しいような図書館になってゆくでしょうが、まだ途中にわれわれはいると思います。宇陀先生がおっしゃったフューチャーセンターのようなワークショップなんかをやっている図書館は、日本ではあまりないでしょうね。住民の方々にとってそういうものがが必要です。公共図書館っていうとどちらかというとレクリエーション施設という感じが強いかもしれませんが、人々の仕事や事業の用には、レクリエーション領域だけのものでは困るわけです。

(宇陀)

オランダのLEFをみせておいてなんですけども、フューチャーセンターはハコを重視してそこで場

をつくるとは限らないんですね。ここの空間だって、今からフューチャーセッションの場にしようと思えばここがフューチャーセンターになるんですよ。要は「場」をどうつくるかということなんですよ。その場づくりのなかに、空間だけでなく人と方法論が入ってくる。そういう意味ではフューチャーセンターは、メソッドというか方法論としてとらえると、図書館も受け入れやすくなるのかなと、今ちょっと感じました。

(永田)

それと、宇陀先生の話のなかに、ファシリテーターが出てきた。今後の図書館員が担わなければいけないのはなんなのか、これまでは資料の専門家というような話だったが、人々の理解が進むように舵取りをしてゆく、ファシリテーションが非常に重要だといわれています。まだ図書館の世界でそれが定着しているとはいえないけれども、そんなことが今後の図書館員の未来像だと思います。

時間がだんだん迫ってきましたので、一言ずつなにかコメントをいただけますか。

(太田)

今日のテーマはソーシャルイノベーションで、フューチャーセンターとか対話とか、いろんな話がありましたけれども、いずれにしてもそれが目的ではないんですよ。図書館とコミュニティと地域っておいたときに、そこのあいだって皆さんもまだもやもやしていると思うんです。で、最終的にはなにを目指しているかという、問題解決、なにかしらの問題解決なんですね。ソリューションモデルをどうやってつくってゆこうっていうことなんだと思います。今までは地域のソリューション、問題解決に対して図書館って、なにもしていなかったんですね。指くわえてみてただけで、本貸してただけで。そこにどうやって加わってゆこうかっていったときに、問題解決ってイコール物語の共有なんですね。コミュニティにおける問題解決、そのプロセスをどうやって組み立てるかっていうと、物語の型って三つしかないと思うんですね。これは編集工学研究所にいたときに、リクルートさんと研究したのですが、一つは未知解決型、これははっきりした問題があって、それに対するアプローチがある程度みえているときに、一個ずつ問題を提示して解決させてゆく方法。これ本来司書さんは得意なはず。「こういう本ない？」っていわれたときに、順番に本を提示してゆく。その当時、もう十何年前ですから、刑事コロンボ型って呼んでいたんですけど、最近の学生にいったら誰も知らなくて、コナン型って呼んでいるんですけど。一個ずつ問題を解いていく。ヒントをみつけては一個ずつ回答を出していく。もう一つのやり方は、関係振幅型。関係ある要素を全部集めておいて、進むべき道はみえていないときに、その関係性のなかでぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅやっているあいだに、なんとなく解決の方法がみえてくる。これサザエさん型って呼んでいるんですけどね。いつもカツオがいたずらしてぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ波平が怒って、いつの間にか平和になっている。このやり方がさっきからいつてるフューチャーセンターとか、これから図書館とかでやりたいことだと思うんですけども。もう一つあるのが、所在転移型って呼んでいます。ある全然違うモデルをバーンってもち込むやり方です。これ、水戸黄門型って呼んでいるんですけど。突然印籠が出てきて、それまでぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ、風車の弥七が出てきてしばらく様子をみましょうっていつてるのに、突然印籠が出てきて解決してしまう。それが、幕別町図書館のストレス測定器を持ち込んでみるとか、そういうやり方です。この三つの物語の型は、どの方法もとれるんで、図書館は無理して一つの方法、例えば印籠型をやる必要もないし。コンサルさんが無理やり印籠をもち込んできて、誰もその印籠を知らなくて、あんた誰みたいになってる例も多いですが、そうではなくて、方法というのは未知発見型になるのか、関係振幅型になるのか、所在転移型になるのかで、プロセスは多様に

あると思うので、そのなかで、じゃあソーシャルイノベーションが目的ではなくて、問題解決のなかの一つの方法としてソーシャルイノベーション的なやり方もある、別のやり方もある、フューチャーセンターかもしれない、という考え方でいいのかなと思います。

(永田)

宇陀先生、お願いします。

(宇陀)

はい、じゃあファシリテーターに関連して一言申し上げます。現在、国立大学図書館協会でも、大学図書館の未来を考えましょうという事業があり、その事業の一環として未来の図書館を考えるワークショップを開いたんですね。西地区と東地区で一回ずつやりました。最初は西地区でやったんです。ワークショップですからグループをつくって議論します。そして、グループごとに委員をファシリテーターとしてつけたんですね。委員はほとんどが大学図書館員です。ワークショップの最後に今後の大学図書館をどうするかというアイデアを発表するって段になったときに感じたのは、ファシリテーターとして上手な人が入っているグループはやっぱりアイデアもおもしろいんですよ。最後に投票してどこのグループのアイデアが一番よかったかを決めました。

次に東地区で同様のワークショップを行いました。参加者は東地区の大学図書館員ですが、ファシリテーターは変えずに西地区のメンバーでやったんです。そしたらおもしろいことが起こりまして、西地区で負けたグループのファシリテーターが自分のファシリテーションのせいで負けたと思ったんでしょうね、そうしたら東地区のワークショップでは西地区とは違ったファシリテーションをやりはじめて、結果として東地区のほうがおもしろいアイデアが多くでした。

これは私の独断と偏見でいいですけども、図書館員はファシリテーターに向いていると思いました。最初はファシリテーターってなにをするんだろうと、とまどっていたようなんですが、一度経験すると学習能力が高いと申しましょうか、なんかうまいんですよ。なにがうまいかはもう少しまくいえないんですけど。ということで、図書館員はファシリテーターに向いています。

(永田)

最後に、お二方から図書館の方々に夢を与えてくれました。今日は「図書館とソーシャルイノベーション」というテーマで3時間お付き合いいただきました。時間がきてしまいましたが、ご満足いただけているかどうかはわかりません。その結果はお手元のアンケートにぜひお書きいただいて、次回の足しにさせていただきたいと思います。次回の参考にさせていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。これにて閉会といたします。

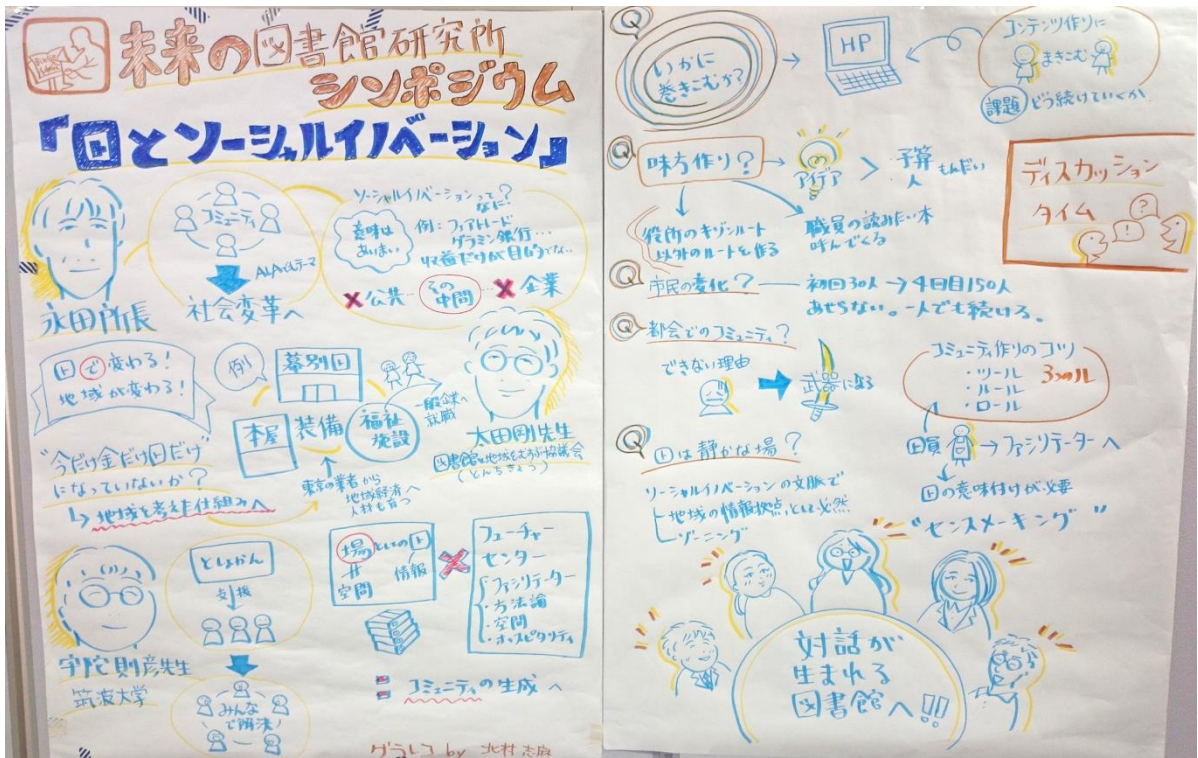


図 15 図書館パートナーズ北村氏による本シンポジウムのグラフィックレコード